

当書物のタイトル『エホバの神が聖書を読みながら書いていく聖書注釈書 ～聖書の真意～』

当記事の著者（執筆代表責任者）：エホバの神（ヤーウェ、アッラー、ゼウスに同じ）

書記（執筆責任者）：大天使ミカエル（元イエス・キリスト）

目次

第1 ガイダンス

1. 聖書とは何か
2. 宗教とは危険なものである
3. グローバル社会に生きる現代人の国際教養のため
4. エホバの神から直接聖書の教育を受けるチャンス
5. 聴くだけ教材の害悪
6. イエス・キリストとは何者か。その使命とは。
7. 上記（1・2・4・6）に付随した発展的論文（危険な宗教と安全な宗教を導き出す論文）

第2 聖書注釈（聖書を読みながら、その都度理解の助けにしてほしい）

1. 使用する聖書の紹介
2. 各書簡の各章ごと注釈

※オウム真理教（現アレフ）の危険性

・麻原彰晃が神ではないことの証明

（1）麻原彰晃の神性証明失敗

- ①力の証明の失敗
- ②知の証明の失敗
- ③教義内容の本質的失敗
- ④経験（経緯）上の失敗

（2）別の者が神（唯一性）であることの証明

第3 聖書の要約・考察、よって導出される結論

1. 聖書の要約

（1）旧約聖書の要約

（2）考察

- ①聖書が示す救済計画の物語
- ②それにとまなう問題
 - i. 証拠の欠如（科学的証拠による事実の反証）
 - ii. イスラエルが世界を征服する預言になっている

（3）新約聖書の要約・大意・考察

(4) 警告 (聖書なんかに騙されるな！)

①「聖書が正しいと言う人間の間違い」(例：大量虐殺という犯罪行為の肯定)

②聖書中の全ての主要事実は、科学的証拠によって否定されている。

③これらの聖書中の教義・戒律を集めてあらわれる共通点は、「神を名乗る」ことによる「実害行為」

2. 結語

本文

第1 ガイダンス：

これは、『大天使ミカエルインカーネーション』の最後の記事 (<https://michael-incarnation.seesaa.net/article/517027324.html>) を書き終わってから、暇で書きに来ている。

神は、暇だと何をするかというとき聖書を読み返す。

今まで聖書というのは、もちろん、全部を速読で何度も読んだが、速読を使って読んだ場合は、全部が読めるが、この世界の人間のようにいちいち立ち止まって読んだりはしないから、読んでいるときの味わいは違うから、暇ができたから、人間のように立ち止まって読みたいと思う。読んだら各章ごとに俺が概要と解説を書いていこうと思う。

1. 聖書とは何か

聖書というのは、実質的には俺 (キリスト) が書いたテキストだけが聖書なのだが、俺の書いたテキストは、正しくは「真理書」になる。

この低次元世界の人類が聖書と読んでいる本は、嘘ばかりが書いてあって、その中で唯一正しいことが書いてある書簡が「福音書」になる。聖書は、神が、世の中を苦しめるために書かせた混迷への誘導書だからだ。

なぜ、神は、このようなことをしたかというとき

神の設計した、この世界のシナリオは「混迷からの救い (苦しみからの救い)」だったからである。このテーマ性・シナリオに沿って、世界の歴史は進んでいるが、その中に聖書というものを落として、苦しみを与えてきたのだ。

なぜなら、先代の神祖 YHVH は、そういう性格の神だったからだ (俺の代になって、それは変わったので、この修正をもたらしたのだ)。

よって、宗教だとか聖書だとかいうと嫌っている人間が多い。大体は、それをするとき被害を受ける内容で、迷惑を被っているからである。

だから、キリストの言行を書いた所 (福音書) 以外は、聖書とは「迷信」を書いたものであって、俺が (再臨して) 来てやっとその迷信を明らかにしたのだ。

正しいことをおろしにきたイエス・キリストなんて、聖書の内容なんて全然守っていなかった。聖書とは、そういうものなのだ。

よって、イエス・キリストがもたらした教えは当時において革新的な内容だった。

俺がもたらした教えも、以前のイエス・キリスト同様に、従来の基督教の解釈とは大きく異なる内容になっている。

神は、全ての用事が終わって暇すぎるから、天国に行く予定時間まで暇すぎるから、この記事を書いていくのであって、これまでの講義の内容は全部終わっているから、これは読んでも読まなくても関係ない付録になる。神も暇すぎると聖書を読んで遊ぶのだ。神の遊びは、聖書とか、仏教の経典とか、古事記とか日本書紀とか、ヴェーダとウパニシャードとか、マヤ碑石（ステラ）とか、ヒエログリフとかを読んでいくのだが、それは本当に「時間つぶし」であって、次の天国便までの待ち時間をつぶす時間つぶしになる。

本当は、聖書というのは「福音書」以外は、読んでいい内容ではないし、本をたくさん読めばいいと言っている人間がいるが、それはNo（ノー）だ。

理由は、確かに学校の勉強はやらないといけないものだと思うが、それ以外の文献は、害悪が多く入ってくるから、決められた本当に良質な読み物（俺の書いた教科書・福音書）以外は、読んだらいけないのだ。心に悪魔が入ってくるために書物が氾濫しているからだ。

これは、あくまで付録でつける聖書の解説本であり、聖書というのが「福音書」以外は害悪を発生させるために、神 YHVH が作らせた「混迷誘導書」だということを忘れてはならず、この本自体は、俺が解説を書くに値しない「ゴミの本」だということを常に念頭に置いておかなければならないのである。

預言者の内、嫌いな奴も多いからな。神（ヤーウェ）は、善化した今となっては、その預言者たちを嫌っていると言っているのだ。神が言う「預言者」とは「キリスト（俺とイエス・キリスト）だけ」だと今は訂正している。

2. 宗教とは危険なものである

宗教というものは、後に注釈で書いていくが、危険なものである。

ユダヤ教であれば、旧約聖書に民族的優位性とその土地の所有権が主張されているから、民族紛争・領有権争いの戦争の原因になっている思想になっている。

上記で、「聖書は、神が与えた混迷への誘い、不幸になる読み物。」と定義しているように、他の宗教に関しても、危険なものがほとんどである。

信じることは美徳であると思うが、他人の生命・身体を自由を侵害する権利は無い。

信仰の自由（内心の自由）と身体・生命の自由が対立して、この身体・生命の自由に衝突した場合が、どちらが勝つかを比較すれば、優位性は明らかである。

内心というものは、内心においては自由なのだが、外部に出た場合は弱くなる。

なぜなら、外部には、実力というものがあるからである。

実力というものは、その構成員の生命に依拠するものであるから、彼らの生命を奪おうとした場合、それによる反発を受け、過度な信仰であれば、信仰者の生命が消されていくことになるだろう。

これを起こす宗教が正しい宗教かどうかの評価については、神ヤーウェすらも、大天使ミカエルに否定をされ、論されてやっと正しい評価が分かったのである。

霊言によってもたらされた宗教である場合、

その宗教が本当に神からもたらされたものかどうかは、誰にも分らないことであるから、宗教は、信じるのではなく、疑うことが正解である。

なぜなら、誤っている宗教の延長上には、神にすら危害が及ぼされる未来の可能性が生じる。神だから、神にとって正しいことをするとは限らない。神とて単一の生命体なのだから、自己に不利益な思考や行動をする可能性がある。そのため、神自身が、自らの思考や行動を正しいかどうかを確認する手段は、「論理的整合性」の確認である。自身には、この確認をする資質が不十分であると判断したため、自身の正義の心から大天使ミカエルというより優れた存在を生み、大天使ミカエルの正義に従うことにしたのである。

よって、神祖がミカエルの代にかわってからは、「宗教というものは、信じてはいけない」という評価がえになった。

大天使ミカエルの教えというものは、彼が正義の使者であるために、正義の教えになっている。正義というものは、事実を重んじて、真実の上に、正しい論理の積み重ねによって、結論があるというものである。嘘というものをゆるさず、誠実であるということが大天使ミカエルは重視し、誤った結論（損害が大きくなるため）には進まずに、最善の結論に進むことを教えとしているのである。彼自身が、混迷の世を正しい世にかえるために神が生んだ存在だったために、彼は最善を行くということを行動目標の第一にしている存在であるから、神ヤーウェ（神エホバ）よりも、大天使ミカエルの方が正しいことを教える。

よって、神ヤーウェは、神祖の座を大天使ミカエルに継承させ、現在の神の第一位は、神祖ミカエルとなっている。神祖ミカエルとは、神ヤーウェが正しい神になりたかったために、自らから生んだ「正しい自分（正しい神）」なのである。

よって、聖書の各章に書いていく注釈は、ユダヤ教や伝統的カトリックが聖書に与えている根拠のない解釈に対して、否定的な注釈が書かれることになるが、それは神自らが真実（事実）・真理（論理）を重んじているために、観測されなかった虚偽の事実や論理的な誤りの解釈を否定するものになる。

この書は、帰りがけの神が待ち時間の間に暇つぶしに書く注釈書であるが、それでも正しい神が書くものであるから、衆生を迷い（迷妄・迷信）から目覚めさせる機能を持たせる書になる。

3. グローバル社会に生きる現代人の国際教養のため

戦力ではなく、言葉で理解をし合い、共通の問題を解決していく国際社会の一員として生きていくためには、自分の理解を相手に求めるのではなく、相手の考えの基礎を理解しなければならない。国際社会の紛争を解決するためには、その原因となっている思想（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の原点）を理解しなければならない。

どれくらい聖書が世界で流行っているかというと

西暦を見れば分かる。

例えば、俺はタイムスリップして貴様らがいる次元世界に来ているが、タイムワープしてきたときに、まず確認するものは、その辺のニュースで「今年は西暦何年か？」なのだ。

世界で使われている、この西暦というものは、「キリストの誕生を元年とする紀年法」になっている。

次に、西暦で「クリスマス」という日を全人類は、恐らく年間で一番楽しみにしていると思う。

クリスマスよりもバレンタインが楽しいという人間もいるかもしれないが、

クリスマスの日は、キリストの誕生日だと想定しているそうだ。

次にバレンタインの日は、兵士たちに禁止されていたキリスト教の結婚式を密に行っていたバレンタインの殉教日だったのだ。兵士たちが結婚すると戦場から逃げてしまうと思った権力者が兵士たちの結婚を禁止していた。

次に、西暦には日曜日がある。人間の皆が楽しみにしている日だ。

祝日である理由は何かというと

最近では日曜日や土曜日だけでなく金曜日まで休みになるかという勢いだ

がキリスト教の礼拝日が日曜日だから、日曜日は休みになっているのだ。

何で日曜日かという

土曜日は神が天地創造の7日目に休んだ安息日とされているが、

安息日よりイエス・キリストが復活した日だと考えられているから、安息日より日曜日がキリスト教では休みになっている。

金土日の解説をすると

金…アダムの創造された日→特別な日とされて、イスラム教では、クルアーンに「金曜日の礼拝の呼びかけがあったなら、アッラーを念じるために急いで向かい、商売などはやめなさい。それがあなたにとって最善である」(スーラ・ジウムア 62:9)とあるので、休日になっている。

土…神が天地創造の7日目に休んだと考えられ安息日だから、休日になっている。

日…キリスト教の礼拝日(イエス・キリストの復活日と想定されている)だから、「多くの国で」休日になっている。

よって、週1で休みにする場合は、いつが休みかという「日曜日」が最も有力になる。
これは、イエス・キリストが復活した日と考えるために、休みになっているが、
金土日とも全て聖書に由来がある訳で、
聖書の知識は、グローバル社会で対話をするために重要な知識になっている。

このように、聖書なんて関係ないと思っている現代の日本人においても、楽しい日というのは、たいていが、聖書に関連付けられていて、西洋人のキリスト教布教戦略というのが見え隠れしている。

大日本帝国が宗教の自由を認めた背景には、諸外国と交易するという理由があったためである。

次に、この聖書は、ギネス世界記録で「世界一発行された本」として認定されている(1995年)。

この理由は、約1500年にわたり印刷・配布されてきたため、ギネス世界記録では、1995年の時点で、総発行部数は約50億部と推定され、聖書の総発行部数が他のどの本よりも多いと認められている。

2021年のギネス更新では、英国外国聖書協会の調査に基づき、推定発行部数は50億～70億部に範囲が広がっている。

3200以上の言語に翻訳されており、これは他の書籍を圧倒する数字であるし、

2022年だけでも、世界で約3550万冊が頒布されたという統計がある。

世界中で、これだけ発行されている本は、あまり例は見ない。

よって、異国人と共通の話ができる本として、聖書はある程度機能する。有効な会話の内容をするためには、聖書の知識が不可欠である人間が多い。これらの事実から、相手の文化を理解するために、参照するとよい国際教養的読み物ということになる。

4. エホバの神から直接聖書の教育を受けるチャンス

著者の俺はエホバの神（本もの）なのだが、大天使ミカエルという化身を低次元界（貴様らがいる人間界）に派遣をして、大天使ミカエルと同時直通で活動をしている。変化のある世界（低次元界）での修業が神の修業になるからである。

俺が元の世界に帰る前に、この俺自身が滞在している間に、聖書の注釈を書いていこうと思うが、

人間界の大学の神学部全教育をチェックしていると聖書の全巻を通読する教育は、大学の講義時間が足りなくなるから、カリキュラムとしてはあまりないように思う。

概論を話している講義であって、一文字一文字読んでいく教育はあまりないように思う。

しかし、聖書の内容を理解している者は神（エホバ）しかいない。預言者は、俺から指示された言葉を伝えたのみであり、預言の全てを理解している訳ではない。預言者ですら聖書を

理解していないのだから、人間が聖書を教えるとき、その言葉を変えるほど間違いのリスクが生じる。これまで人間界の世界中の全ての神学の講義をチェックしたが、聖書の解説は9割の内容が間違えていた。よって、俺の解説の9割は、既存の神学教育が行っている解説とは違う「新しい解説」になるだろう。9割ある人間の聖書解説の間違いの中で、最も重要な間違いは、聖書というものは、「救いのために送って書かせたものではない」ということである。邪神が、言葉たくみに人間を騙して苦しめようとしたアイテムである。ゼウスという神はパンドラに持たせて負の容器（壺又は箱）を送ったように、聖書を入れる箱も箱というが、人間の諸活動の大から小までの様々な所に苦しみを生じさせるために書かせたものである。その中で、福音書だけが光を放っているのは、まさにパンドラの壺（英語では箱と訳されている）に希望だけが残っていたという話と同様である。ゼウスが美しい女に持たせて送ったプレゼントというものは、実は山のような負債であって、その美しく見えたものが聖書だったのである。これ以外に聖書を形容する言葉は無い。聖書とは俺が書いた読み物だから、聖書を知るためには俺から真意を教わる必要がある。ぐちゃぐちゃに書いた読み物であって、書いているときは結構面白かったが、後から社会の混乱を引き起こしたので、ここで修正の読み物を書かなければならないと考えた。

これまで俺が書いてきた書物の中では書いていて一番面白かったのが聖書だったから、聖書の解説をしだすと話が長くなりそうだ。

よって、解説は短く書くということを肝に銘じて書いていこうと思う。

実は、幕末から続く日本の過激な攘夷運動や第二次世界大戦でのアメリカとの戦争の一因に、この聖書の内容がある。

日本では、天皇を「万世一系の神」として日本国民を長年統合していたから、今でもキリスト教の神を信仰している日本人は少ないが、これを理由として、諸外国との交友を嫌っていたのである。外国からキリスト教が入国すると天皇を神とする支配体制が崩れることを忌避していたためである。聖書も聖書で古事記とかと同じ書き物だったが、日本の場合は、統治者である天皇の先祖が天照大御神だと本気で信じているし、この神話的根拠に基づいて国土・臣民の支配権を主張して統治をしていたし、聖書によってユダヤ人は同じように（神話的根拠に基づいて）統治されていた。古い時代だとなぜこうなったかという人々は、雨が降る理由とか、生命が誕生する理由を分かっていたから、耕作等の発展した文明を持っている組織から「万象を操作する神がいる」と吹聴されることによって、信頼できる何の情報も持っていなかった民は信頼し信仰を始めてしまったのだ。そういう意味では、救われたので信じたといっていいいかもしれない。世界中の歴史を見ると神を主張して統治に成功した事例の共通点を観察していると民はそれで豊かになったので信じたという出来事ばかりだった。それをさせて面白がっていたのは、かつての俺だったのだが、なぜ民が信じたのかというそういう理由だった。苦しんでいた時代ほど救いを求める人間共によって神の教えは流行ったという事実もある。もう1つは反乱を防止するという国家統治的な意味で大きな理由があった（神の助勢があると信じた兵の士気も高まった）ために、このように言う

と恐れられて中々反乱が起きなかったから、神の子孫であるという主張になっていったし、大規模な国土を統一している組合になると科学が発展する前の時代においては、民主主義や自由主義よりも、絶対王政の仕組みが流行りやすくて成功しやすかったのだ。聖書もまたこのような未文明の時代の古い遺産物である。神にとっては、これは神典ではなく笑典というべき駄作である。しかし、この笑典も、悪魔の時代をつくるという意味では、一定の機能を果たしていた。この聖書（ブラックボックス）の中から飛び出すものは、神や天使ではなく、民族紛争・対立・宗教戦争を起こす悪魔（邪神）の仕組みだったのである。神が、こうつくったものであるし、事実として、これらの歴史上の事実が聖書によってつくりあげられていったのだから、俺が今説いているこの機能は誰にも否定できるものではない。

ここでは、エホバの神が、直接聖書の注釈を書いていくので、エホバの神から直接聖書の教育を受けるチャンスは、ここしかないと思う。ここでは、神から聖書の真の意味を学ぶことができる。

よって、神学部に入ったと思って、各自が聖書を読み進めながら、俺の書いた注釈を読んで聖書の内容を理解していくチャンスである。人間界の古今東西の全ての神学教育をチェックして知っているエホバの神が書く内容だから、人間界の全ての神学教育の内容を上回る注釈になるだろう。

500万文字レベルの聖書を読む機会というのは、多くの人間にとっては一度きりになるだろう。その一度のチャンスを不理解の講義にゆだねて進んでいくよりも、エホバの神の解説つきで読んでいった方が有意義な学習になる。

5. 聴くだけ教材の害悪

聖書の聴くだけ教材を頒布している人間がいるが、文章というものは前後関係を比較しないと理解できないものである。聖書では、同じ名称であるものの違う個体である名称が解説なしに登場し、その前後を読まないと同じものか違うものかが分からないようになっているし、かなり章が離れて書かれているものもある。人間の記憶・情報処理能力は、そんなものを全てストックして自在に使えるようにはなっていないから、この不理解のままに読み進めて築き上げた理解は間違っているものであるから、聖書は必ず文章で読まなければ理解できないものである。

まして、生涯に一度しか通読できないような読み物であるから、その一度の学習の精度を上げるために、聴くのではなく、読んで内容を把握するものである。一度読んで理解をすれば、それからは耳から情報を入れても復習だからいいのだが、最初は必ず書面で内容を学習することが理解のために重要である。

6. イエス・キリストとは何者か。その使命とは。

イエス・キリストは神の子であった。それは、かつての話であった。現在は、神となっている。

イエス・キリストの使命は、神の子として、次の神になるための試練を人間となって受けに来たのである。

神の子イエス・キリストは、エホバの神の跡継ぎが約束されていた神の子であったため、神になるまでは、立派な神になるための修行を受けなければならなかった。

それが、人々から理解されず馬鹿にされ、磔刑になることだったのだ。これは忍耐力を試す試練であったのだ。正しいことをするためには、近視眼的な苦痛にとらわれない忍耐力が必要となる。正しさを目指す神は、自らの分霊を子として生み、立派になったその子を成長させ、合体することで自らが成長し、正しい道を歩もうとしたのである。

貴様ら人間も同様の経験をする人が多いと思うが、子が親のあとを継ぐということであり、あとを継ぐまでは子にはそれほど大きな実権は無い。実験は親（エホバ又はヤーウェと呼ばれる神）が握っていたためである。

旧約聖書というものは、その誤っていた時代の神が創作した有害書物であるため、自らが更改しに来たのである。それが福音書であったが、その後、イエス・キリストは更に天上界で修業を積み、大天使ミカエル、そして、その先にある最高の神リソー・リーガンスト（神祖ミカエル）となって、再びこの地上に現れ（再臨し）、『大天使ミカエルインカーネーション』に代表される教科書を残していったのである。

この書は、その神が、あまりに優秀すぎる神であるため、さまざまなタスクを予定より大幅に早く、美しく、終わらせることが早すぎたために、天国に帰る予定時間（天国に行く便）までの間、遅滞行動として書いていく書物である。

遅滞行動にはさまざま選択肢があったが、俺が残した聖書に俺自身が終止符を打って帰ることが、善化した神が過去のあやまちを改めることになり、有意義であると考えたためである。神の望みは永続する平和であり、そのために今後聖書が戦争（領有権争い・民族紛争・宗教戦争・対立等）の原因として利用されないように、聖書の迷信に終止符を打つ。神（エホバ）の望みは、ユダヤ教・イスラム教・キリストの系譜をひいていない非原始キリスト教（カトリック・プロテスタント・東方正教・その他新興宗教）を終わらせることである。神よりも著しく能力が劣る人間が構成する人類にとっては、宗教間の対立を無くす未来は、俺が説いていない非原始宗教を終わらせる以外に存在しない。神の教えが今後違法に人類の営利目的の戦争に利用されないように、これらの迷妄的宗教を終わらせたい。

7. 上記（1・2・4・6）に付随した発展的論文（危険な宗教と安全な宗教を導き出す論文）

モーセは、ユダヤ教の創始者であって、政治的指導者だった。

そのモーセが考えた政治・宗教体系がユダヤ教であり、これが旧約聖書の根幹になっている。旧約聖書では最高位の預言者とされ、モーセの掟に従うことが全てだといわれている。

俺が、イエス・キリストのときに、俺が殺そうとしていた勢力が、カイアフアというユダヤ教の指導者の勢力だったが、このカイアフアが俺に言ってきたセリフが「俺らは、お前の弟子じゃないんだ。俺らはモーセの弟子なんだ。」というセリフだった。
このセリフが、大天使ミカエルに転生しても非常に心に残っていて、では、ユダヤ教の最高指導者であるモーセがどういう男だったのかを聖書に残っている記述から紹介したい。

このモーセがどういう男だったのかは、旧約聖書にその「一端」が残っている。神聖だと定義する行動模範的文献にこれだけ残っているのだから、実際は、これよりも残虐だった。

(1) 民数記 31:14-18 (ミデヤン人に対する命令)

「モーセは、戦いを終えて帰還した軍の指揮官たち、千人隊長、百人隊長に向かって怒り、彼らにこう言った。『(ミデヤン人の) 女たちを皆、生かしておいたのか。…直ちに、子供たちのうち、男の子は皆、殺せ。男と寝て男を知っている女も皆、殺せ。女のうち、まだ男と寝ず、男を知らない娘は、あなたたちのために生かしておくがよい。』」

ミデヤン人との戦争後、モーセは女性と子供の殺害を命じている。
しかも、この命令のうっとうしい所は、

この例の通り、モーセは、いつも「主が命じた」と言って残虐な命令を下していた。神の命令として、捕虜の男児と既婚女性の皆殺しを命じ、処女の女性のみを生かすよう指示している。

ユダヤ教の宗教的な影響力を保持したいがために、男児と既婚女性の皆殺しを指示している。

これは、麻原彰晃のオウム真理教よりも残虐な行為だった。オウム真理教も平和とは共存できないようなイスラム過激派的宗教だったし、弁護士を法では倒さずに有形力で罪のない子供まで倒すという武士道に反する情けない行為であったし、地下鉄サリン事件は一番ひどかったが、無関係な人間達を無差別に殺害していくという正しい神の道德・倫理的な法とは反する社会秩序を乱す行為だった。

この過激派テロリストにも劣るのがモーセだったのだ。

(2) 出エジプト記 32:27-29 (金の子牛事件)

「モーセは彼らに言った、『イスラエルの神、主はこう言われる、「あなたがたは、おのおの腰につるぎを帯び、宿営の中を門から門へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ』」。レビの子たちはモーセの言葉どおりにしたので、その日、民のうち、おおよそ

三千人が倒れた。」(出エジプト記 32:27-28)

これは、イスラエルがシナイ山で金の子牛を崇拜した後に、モーセがレビ人に民の大量殺害（反逆者の殺戮）を命じた事件である。

この行為は、偶像崇拜への神の裁きとして正当化され、レビ人の忠誠が称賛されている。

「兄弟・隣人を殺せ」というイエス・キリストの「隣人愛」とは反対の内容を命じている。1日で3000人が死んだと読めるが、実際は、3000人以上で、見ていったら4500人くらい1日のうちに殺されたのだ。

だから、翌日とかも含めたら、初日にたいてい殺されているものの2～3日で6000人くらいが死んでいき、トータルでは1万人くらいの人命が、このモーセの一言によって奪われたという人命軽視の話が書かれていて、預言者だったら、これを一言言えばそうなるのかという倫理観の崩壊が、旧約聖書の最初の方に書かれているために、この書物を読んでもと邪神に洗脳されて、これを例としてとりあげて、同じようなことをしてしまう動きが仕組まれている。

国内で暴動が起きないためには、ユダヤ教を禁教にする必要があることが、ここから分かるだろう。

(3) 申命記 20:16-18 (カナン諸民族の殲滅)

「あなたの神、主が嗣業として与えられるこれらの民の町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない。すなわちヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとはみな滅ぼして、あなたの神、主が命じられたとおりにしなければならない。」

聖書をよく読まないという内容に気づけないので、聖書を読ませているのだ。

「ここまでやるか？」と思わせる命令だったが、異教徒の町では「息のある者をひとりも生かしてはならない」と大殺害を命じている。

行った町で、そんなことをするのはイスラム過激派くらいのものだ。

チンギス・ハンのモンゴル帝国の暴虐を想起させる。

これは、異教の影響を排除し、イスラエルの信仰を純粹に保つための措置だったとされるが、占領者の内心のために、カナン征服の際、モーセは神の命令として、指定された異民族の完全な殲滅を指示したのだ。

これは、偶像崇拜や異教の影響をイスラエルに及ぼさないために、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人などを皆殺しにしたのだ。

これは、現在の国際法では、完全に違法である。
人間というものは、見た目や構造は同じであるのだから、違いはないのだから、あくまでフェアで考えていかなければ公正ではないのだが、イスラエル民族の優越性を提起したモーセのこの手法は、まさにナチスドイツの民族優位性の主張と同様の手口だから、こういう暴虐な行動が目立っていたのだ。

本質的に、これはナチスと同じ狂気なので、読むほどにこの宗教の危険性が分かるだろう。

(4) 民数記 25:4-5 (バアル・ペオルの事件)

「主はモーセに言われた、『民の首長たちを取り、彼らを主のために、日の光のもとに掛けさせなさい。そうすれば主の激しい怒りはイスラエルから取り去られる』。モーセはイスラエルのさばきつかさに言った、『あなたがたはおのその部下のうち、バアル・ペオルに身をささげた者を殺しなさい。』」(民数記 25:4-5)

イスラエル人がモアブの女性と交わり、バアル・ペオルを崇拝したため、神の怒りが下り、モーセは首謀者の公開処刑を命じた。この事件では、ピネハスが槍で男女を刺し殺し、神の怒りを鎮めたとされている(民数記 25:7-8)。

これは、まさに東京裁判くらい違法性のある処分だった。「勝てば官軍(何でも正しくなる)」という言葉が明治維新くらいの頃から流行っていたが、日本が戦争に敗れたときは、アメリカ・イギリスという戦勝国からほとんどの裁判官が派遣されて、最初は弁護人がつけられない間に裁判が開かれて、弁護人が良いことを言うときは、書記しなくなって、「記載なし」になっていた。

当時は、罪として規定されていない罪を新たに創設して、その新しい規定によって過去の罪をさかのぼって裁いていくという違法な裁判だった。A級戦犯の罪は当時もあったが、B級・C級戦犯者の犯罪は、そのときに新たに創設した罪だったのだ。これではフェアではなく、正義が支配していないように思う。

裁判11人の中で、国際法の専門家のインド人判事が一人いて、その判事だけが、「この裁判が違法だから被告人全員が無罪だ」という判断をしたが、残り10人全員が有罪だと判断したために、処刑されてしまった。

このとき、昭和天皇は、皇居の近くのアメリカ大使館にいたGHQのマッカーサーを訪れて、「敗戦国の元首命だから乞いに來たのか。敗戦国の元首というものはいつもそうだった。ド

イツのときもそうだった。さあ、どんな命乞いのセリフを言うのか、聞いてみようじゃないか(笑)」とマッカーサーと側近に思われていたが、リンとした態度で、「敗戦の責任は私一人だけにあります。国家の文武百官は私に任命責任があるので、私一人だけを処刑してください。無関係な国民にこれ以上苦しみが生じないようにしてください。」と申し出たために、マッカーサーは大いに感動して、敗戦国の元首なのに「陛下！」と呼ぶようになって、予定されていた10分か15分くらいの会談時間を大いにすぎて35分くらい会談していた。

最初にマッカーサーは「よう！ヒロヒト（昭和天皇）。お会いできて幸栄です。」と。

昭和天皇は「自分は124代天皇、ヒロヒトです。」と。

マッカーサーは座って、「どうぞ、お座り下さい。」と。

昭和天皇は「いえ。」と言って立ったまま話す。

マッカーサーは「ヒロヒトは、たばこをたしなむようですね。アメリカのたばこはどうですか？吸いますか？おいしいですよ。」と言って、ヒロヒト天皇にたばこをさしだしたのだ。マッカーサーの写真を見ると写真でもたばこを吸っているよな。ヒロヒトにアメリカのたばこを出したのだ。アメリカのたばこを出して吸わせるのは、敗戦国の元首には屈辱だろうと思って、マッカーサーはそれをしたのだ。

なぜなら、マッカーサーはアメリカから「天皇を処刑するために」来ていたのだ。マッカーサーは最初は天応を処刑したかった。

するとヒロヒトは、りんとした立派な態度で、「いえ、せっかくですが、私は、これを申し上げるために来たのです。日本がこのような戦争をした責任は、全て私にあります。文武百官の任命責任は私にありますので、私だけを殺して下さい。私は連合国の決定に従います。その代わり、他の皆は許してあげて下さい。今、国民は飢えていて食料がなく、衣食住に苦しんでおります。国民の衣食住に配慮して頂きたく、ご高配頂きたいと申し上げに来ました。」という趣旨のセリフを言ったのだ。

そうしたら、マッカーサーは、「この日本の国王は、日本で最も紳士であろう。この国王は自らの命を顧みず、ただ国民のことだけを思っている。崇敬すべき方だ！」と感じて、突然立ち上がって「陛下！すみませんでした！今までのご無礼をお許してください！」と言って、立ち上がって、立ったまま近くにいた人間に「すぐに陛下にお茶をお出し下さい！陛下は今興奮しておられるので。」と言ったのだ。

それからのマッカーサーは、アメリカの公務員か連合国の最高司令官だったのだが、それからは天皇の臣下みたいになっていて、度々アメリカ政府からの命令に反発して、アメリカに天皇不起訴を認めさせ、天皇のために食料支援をアメリカから引き出したり、日本を直接統治ではなく間接統治にしたし、治安維持法を改正させて共産黨員も出所させて人権問題に関してもものすごい配慮をして憲法に人権規定を十分に入れてくれたし、天皇制を残してくれた。これは奇跡というほかない天皇制の残存だった。

政治をする権利はもともと天皇にない時代は長かったし、その頃に戻った方が天皇が政治

責任から切り離されて安全になるから、鎌倉～江戸時代の頃に戻ったと思えばいいわけだ。戦後の日本に金がないから、天皇が皇室の宝物を売って一瞬だけでもしのげたらと思って国民への食料にかえようとしていたから、マッカーサーは、「そんなことをしないでください！私が必ず何とかしますので！」と言ってそれを止めて、アメリカ本国とかけあって、食料支援を引き出したのだ。

天皇というのは、国民を愛してここまでされる方だったので、日本では、神道以外は流行らないのだ。まだまだ日本人は天皇を崇拝しているから、当時はほぼ全国民が天皇を神だと思っていたし、天皇が神だと思っている子孫は、まだまだ多いから、今の日本でもキリスト教という異国の神なんて信仰しないのだ。仏教は神とかを出してこないし、過去の天皇も信仰していたから、まだ日本ではなじみがあるが、戦勝祈願に行ったのも神社だし、日本人が他の宗教を信仰しない理由は、この理由なのだ。天皇が国民のために奔走されて、今の戦後復興があったために、その恩は、当時の人たちは忘れていないので、当時を知っている人たちは、命がけでも、一生天皇を神だと崇拝するから、それを知らないキリスト教信仰者共はキリスト教を日本でばらまこうとしているが、日本はまだまだキリスト教が流行る土壌にはなっていない。日本人は天皇を愛しているし、御前会議で内閣から決定をふられたときに終戦を決意されたその天皇が平和を愛して戦後に尽力されてこられたので、これからも日本人は天皇を愛しているなら、その国際平和の象徴を愛して、戦争をしない国であつたらいい訳だ。それにキリスト教なんていうものは、よほど苦しんでいないとそんな新しいものに救いを期待しないだろう。歴史的に奴隷支配を受けて隷従している人たちが苦しんで期待した教えだから、今の豊かな国の民の場合は、キリスト教や仏教がなくても、精神的に幸福で充足される方法を別に探しているし、キリスト教や仏教の修業は、それよりも苦しいものだから、こんな修業の先に隠された道があることは人間には見つけられないから、流行るかどうかといわれると俺が、こうやって道を示さないと「正しい宗教ならレベルが高い」ということは伝わらない。

この天皇を崇敬していたマッカーサーは、東京の裁判のときには、アメリカ本国に「天皇は不起訴にしないとイケない。その理由は、天皇を処刑してしまえば、日本中で暴動が起きてしまい、何百万人というアメリカ兵を日本に何年もくぎ付けにしないとイケなくなるからだ。」と伝えたために、アメリカ政府は天皇を不起訴にすることで了承した。

東京裁判の法廷では、期日中にマッカーサーが裁判長と検察官を呼び出して、「天皇は不起訴にしろよ。」と言って口裏合わせをして、東條英機が愚か者だったから、天皇に責任が及ぶ発言をしていたのだ。天皇は誠実で平和を目指していたから、天皇のためを思えば、あんな独断で勝手な戦争を中国にしかけようとしなくていいのだが、裁判中も東條は天皇が殺されそうになるような発言をしていたのだ。「自分は悪くない。自分は全く悪くない。自分は全部正しい。天皇の命令に従うのが全部の日本人だ。天皇の命令に逆らったことなど日本人は、特に俺らのような高官には一度もない。」という趣旨の発言をしたために、裁判官から「何を言っているのだ？どういう意味の発言をしているのか分かっているのか？だったら、お前

は出所したらまた同じ戦争をするのか！」と言われて怒られていたのだ。

こんな愚か者は、早く処刑された。天皇に迷惑ばかりかけていた奴だった。

開戦前の御前会議で天皇は「四方の海みな同胞と思う世になど波風の立ち騒ぐらむ」（世界中が兄弟姉妹のように思える平和な世の中なのに、どうして争いや混乱が起こるのだろうか）という明治天皇の歌を引用し、避戦の意思を明確に確認していながら、日米強硬論を唱えて開戦にふみきった。「戦争には自信がない」と近衛が止めているのに、東條が激昂してどうしても戦争にふみきった。昭和天皇は外交交渉を望んでいた。だから、東條は弁護人から「この戦争は、天皇の意思に背いて、東條が始めたものだ」と証言しろ」と言われたのだ。そうしたら東條は、「そんなことはできない。陛下の裁可があったのだから、開戦になったのだ。だから、俺は悪くないんだ。俺は陛下の意思に背いてない。陛下が悪いんだ。」と言って責任逃れをしようとしていたのだ。しかし、こいつは、自らの妻には、天皇の意思に背いて活動をしていることをもらしていたのだ。自分は命を懸けて奉公しているが、陛下の目指している奉公とは違う方向でご奉公をしていると東條英樹の妻に言っていたのだ。そして、敗戦の責任も天皇にあるという発言をしていた。だから、当時の検事（キーナン検事）が東條の問題発言から 2 日後に早く訂正させないといけなくともって関係ない話をしているときに天皇の責任問題の尋問を東條にしだして、誘導尋問的に天皇の責任を回避できそうな所まで東條から撤回の言葉を引き出したのだ。これで天皇戦犯問題は不起訴にできると思って、マッカーサーから呼び出されて不起訴を改めて申し渡されたときにキーナン検事は満面の笑みになっていた。昔から東條は頭がおかしくて、いらん戦争をおしきってやる奴だったが、こういう日本の裏切り者が、勝手に始めた戦争だったと思う。天皇と近衛がしっかりやっていたら、あんな戦争の悲劇にはならなかったろう。東條は、頭がおかしい奴で、衆議院予算委員会のときに資源不足に対する対策として 2+3 を 5 にするのではなく、10 でも 20 でも 80 にもする必要があると発言し、東條の算数は「 $2+3=80$ 」「 $1+4=80$ 」だと報道されていた。計算ができない奴は国家を破滅に導くものだが、こんなバカが総理大臣になったら国家が滅亡すると思っていたが、本当になってしまっただけで、東條英機が内閣総理大臣に就任した後に、アメリカとの戦争（太平洋戦争）が始まったのだ。就任日は 1941 年 10 月 18 日、第 40 代内閣総理大臣に就任したが、開戦日は 1941 年 12 月 8 日。真珠湾攻撃を実行し、アメリカ・イギリスに宣戦布告をした。こんなことになったら絶対日本が滅んでしまう。無理すぎるし、知的幼稚性が甚だしい。天皇や日本に対する裏切り者だ。東條内閣のもとで日本はアメリカとの戦争に突入したのだ。国家はこいつによって傾いた。当時は、日本は、莫大な領土をアジア方面に持っていて、まさにロシアくらいの勢いになろうとしていたが、頭が悪い奴が政治を行うとすぐにひっくり返る。近衛が内閣をやっていたら、こんなことにはならなかっただろう。それまで日本はどこにも負けたことがなくて、世界でもトップクラスの地位だと見られるようになってきたのに、戦争で敗れて本当に恥ずかしい光景を世界にさらした。戦争で敗れることは名誉にとってよくないことだが、幸い、日本が負けたのが世界最強のアメリカでよかったと思う。アメリカに負けたのだったら、世界 2 位だとはまだ言えるからだ。ア

アメリカが非常に、自由や民主主義を愛する優しい国家でよかった。この機に仲良くなれたので、アメリカとの同盟はいつまでも大切にして、そこから外れてはいけないだろう。あんな日本とも仲良くなってくれた良心的な国だが、そこには昭和天皇とマッカーサーの二人の尽力があったと思う。もともと鎖国みたいなことをしていた国だったが、あまりに周辺諸国が戦争ばかりで不安定な情勢だったから、対外的に口を出すようになってヨーロッパなど色々な国に投資してきた国だ。今の平和はアメリカによって築かれている。本当は日本もそうならないといけなかったのだ。

連合国側で天皇を起訴すべきと判断したのはオーストラリア一国だけであり、後の国は全部天皇不起訴という判断だった。

オーストラリアの言い分としては、当時の憲法に天皇の責任が書いてあるから、軍権を掌握しているのだから、責任をとるべきだと主張していたが、

当時の天皇は、あまり戦争に関与していなかったから、ほぼ関与していなかったから、その実質面をくんで、天皇は不起訴になったのだ。終戦を決定した功績も大きかった。天皇が終戦を宣言したら、あれだけ屈強で、アメリカにとって脅威となっていた日本軍の兵士が、突然戦争をしなくなって、おとなしく投降するようになったために、「天皇というのは、日本でどういう存在だ？」とアメリカから驚かれたものだった。

マッカーサーは、もう天皇の臣下だったと俺には思えたが、人権概念がしっかりした最新の憲法を作ってくれたし、マッカーサーの人気は日本国民から大人気で、マッカーサーに日本国民から届いた手紙は40万通以上で、手紙には日本人から「ありがとう」「ありがとう」と書いてあって、マッカーサーが帰国する1951年には沿道に20万くらいの日本人が並んで見送りに来ていた。

そのマッカーサーは、本国でアメリカ大統領を目指したが、選挙で敗れて実現しなかったが、もしマッカーサーがアメリカ大統領になっていたら、日本とアメリカの友好関係はより発展したというか、日本の方がアメリカよりも立場が上になったかもしれないから、面白い状況になっていただろう。

こういう歴史から、アメリカやイギリスとの同盟関係は絶対に外してはいけないということを学んでほしい。この国々は、自由主義・民主主義を守る国だから、悪魔に対して戦う国なのだ。

悪魔というのは、神から見ると、宗教戦争を挑んでくるイスラム教過激派とか、絶対王政化した国である。アメリカやイギリスは、もう世界を守るために戦う国になっているから、このアメリカやイギリスを支援するのが日本の今後の使命になるし、この力関係が崩れて悪が勝利してしまうと世界は地獄になってしまうから、もはやアメリカやイギリスが負けそうだったら、日本は憲法9条で戦争を否定されているが、世界を守るために日本が戦わなければ逆に違法になり、損害が果てしなく大きくなってしまうから、そういう場合は、憲法9条は、平和な世の中のときに使うものなので、世界中が悪魔に負けそうで軍事侵略者に襲われているときは、日本も国内外を問わずに戦ってアメリカ・イギリス・EUを助けないと世界

が減んでしまう。それは、書いておこう。

会談が終わって部屋から出てくるとマッカーサーが昭和天皇のことを「陛下！」と呼んで気遣いをするようになったから、側近は会談の部屋で何が起きたのか驚いていたのだ。敗戦国の元首を戦勝国の代表者が「陛下」と呼ぶことは、ありえない考えだったのだ。そこで、マッカーサーの側近は、どういう会談があったのかとマッカーサーから聞いた。

それからマッカーサーは、「彼は一切言い訳をせずに、ただ自分が全ての責任をかぶろうとしていただけだった」「ヨーロッパの元首というのは、皆、命乞いばかりするのに、日本の天皇は似て非なるものかもしれない。日本の国の復興には天皇の存在が必要不可欠だ！」と側近に言って、天皇が戦争裁判にかけられないように奔走したために、天皇は罪に問われなかった。

マッカーサーの側近達も、マッカーサーから会談でやりとりした話を聞いて、昭和天皇を尊敬していたのだ。

そのあと、天皇は戦後の国民の慰安のために全国を行幸したいと発案して、マッカーサーたちは、「そんなことをしたら敗戦国なのだから民から襲われるかもしれないから危険だ！」と思ったが、実際にやってみたら、沖縄を除く全国の都道府県に天皇が8年かけて国民を応援しに行ったら、皆が大歓喜で、マッカーサーたちの想定を裏切る結果になり、「この天皇のもとで必ず日本は平和復興する！」益々「天皇という方は本当に偉大な方だ」とアメリカから思われるようになって、「今日、日本が復興できたのは、アメリカの方々のあたたかい支援があったからであって、いつまでもこの恩を忘れずに、平和な世であることを願います」という立派な発言をしていたので、あんな日本でも昭和天皇は立派ですごい方だと俺は評価している。本当に俺（神武天皇の頃）の子孫なので、天皇家は神の系譜をひく一族なのだが、日本帝国は国家元首が人格者だったのに、非道な戦争になったというパターンだったと思う。

なぜ、この立派な方の代に戦争が行われたのかという戦争の決定を内閣がやっていたのだ。天皇は報告を受けるだけで、終戦の決定のときだけは閣議ではまともらずに天皇にまで話がたって、御前会議をしていたが、そのときに決定がまともらずに陛下に決定をあおぐことになり、天皇は当時の国民の食糧事情が悪くなっていたので、戦争は国民を苦しめるだけだと思い、国民を苦しめないように終戦を決意したという思いだった。あくまで国民と共に在ろうとした天皇だったと思うので、戦争責任を帰すということは、やりすぎだと思ったので、天皇の権力をはく奪し、この天皇家（人間との間の子孫共…広義ではネピリム）の後々の安全というものを図ったのである。自分ひとりだけが全ての責任を負って処刑されようという姿勢は、イエス・キリストに通ずるものであり、まさにこの方は、知能は神のような高

い知能や超能力はないが、心は神から引き継いでいる心を持っていて、体は弱い人間でも間違いなく俺の子孫だと再認識した。

次の預言者は、エリヤが有名だと思う。
誰でも、エリヤ・エリヤという。

列王記上 18:40 では、バアルの預言者 450 人をカルメル山で殺害している。

列王記上 18:40 (バアルの預言者殺戮)

「エリヤは彼らに言った、『バアルの預言者たちを捕らえなさい。一人も逃がしてはならない』。彼らを捕らえると、エリヤは彼らをキシヨンの谷に連れ下り、そこで彼らをほふった。」
(列王記上 18:40)

預言者エリヤは、バアルの預言者たちとの対決後、450 人を殺戮したとある。本当は、もっと多いし、過剰な数を誇示して書いていた訳ではない。見つかった数が 450 人くらいだったという意味だ。これは、神の力を示し、偶像崇拜を根絶するための行為とされるが、このような行為が認められるはずがない。

なぜなら、先も書いたように、特別な人間だという理由がなく、特別な人間だという理由は、本人が勝手に主張したものであって、客観的な情報でその人間共を見て判断した場合、誰でも平等なのだから、平等であるべきなのだ。人命の尊さというものは、人間が人間の上に立つ優位性を認識することによって、崩されることになるから、自らが神であるとか、神の使いであるなどと主張する迷妄者達の言動には、要注意であり、最初からその主義・主張を否定的に見て対応する必要がある。それでも「どう考えても、この方だけは唯一の神である」という場合が、俺のときにだけはある。俺の著作物を読みに来て者は誰も俺を否定しなくなる。その俺は、神の権威によって、こう書かせてもらおう。俺が、こういうことをさせてきた悪霊のボスだったが、俺は大天使ミカエルによって諭されて、善というものに生きなければ、いずれ自らの運命が崩壊する未来を見て改心をしたのだ。神すらも罪から逃れられるものではないと俺は知り、大天使ミカエルに加勢をして、自分自身に内在していた悪霊共と戦い、からくも勝利を収め、これほど悪霊を倒して安全を得ることは難しいことだったのだと知り、以後は大天使ミカエルの正義に服する決心をしたのだ。

その俺がやることとしては、過去の自分の指示を撤回して、悪神の頃の俺が書かせたこの聖書なる負債を世から消し去る活動をするのが、俺の責任のとり方だと思ったのだ。

このエリヤは、列王記下 1:10-12 では、神の火によって兵士 50 人隊を 2 度焼き殺してい

る。

こんな話は嘘っぱちであるが、それくらいエリヤの力の誇張には、残虐性が含まれ、この残虐性が聖書の教えとして、伝わってきたので、これ以上未来に伝えてはならない。

同じことをしてはならないというのが、聖書から読める大体の教えである。

モーセの後継者はヨシュアという者だったが、
この男がどういう男だったかというとその一例として
ヨシュア記 6:20-21（エリコの征服）の話が残っている。

「民はときをあげ、角笛を吹いた。民が角笛の音を聞き、大きなときをあげると、城壁は崩れ落ちた。民はみな町に突入し、…剣の刃でことごとく滅ぼした。男も女も、若者も老人も、牛、羊、ろばに至るまで。」（ヨシュア記 6:20-21）

モーセの後継者ヨシュアは、神の命令によりエリコを征服し、住民を皆殺しにしたのだ。征服地の住民を皆殺しにしたのだ。これは、カナン征服の一環として、神の意志による聖戦とされているが、日本帝国軍が南京とかでやっていたような行為と同じことをやっていた人間をユダヤ人は神格化して、この国際犯罪者からいまだにならっているのだ。
これでは戦争がいつまでも終わらない理由が分かるだろう？
国旗も宗教カラーだが、宗教に洗脳された妄信者共は、善悪を分からずに突き進んでいるのだ。

サムエルという預言者もいた。

サムエル記上 15:2-3（アマレク人への命令）

「万軍の主はこう言われる。『…今、行ってアマレクを撃ち、彼らのすべての物を滅ぼしつくし、彼らを容赦してはならない。男も女も、子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。』」

預言者サムエルは、神の命令として、サウル王にアマレク人の完全な殲滅を命じている。この命令は、アマレクが過去にイスラエルを攻撃したことへの報復とされるが、今イスラエルが中東に対してやっている残虐行為と同じものだ。

イスラエル人が、こういう書物を教科書にしていると同一行為の報復が終わらない。

預言者がやっていたのだから、永久の手本なのだという発想になるから、1位の神が、この話は禁忌であると撤回しなければ、いつまでも報復戦争が終わらなくなるかもしれないから、俺は、この聖書注釈で彼らが信仰する預言者共の愚を伝えていきたい。

次は、エリシャの愚を紹介する。

列王記下 2:23-24 の記録によると

頭が禿げているとからかった少年たち 42 人を、熊に襲わせて殺害している。

では、イエス・キリスト（前回来た俺・俺の分霊）はどうだったのかというとエホバの神だから、残虐な発言をしていた。

マタイ 5:29-30（罪を避けるための過激な比喻）

「もしあなたの右の目があなたをつまづかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。…また、もしあなたの右の手があなたをつまづかせるなら、それを切り取って捨てなさい。体の一部を失うよりも、全身が地獄に投げ入れられる方がよい。」

かつての俺は、未成熟だった頃だと思うが、この頃は位階 8 位の頃の俺だったから、完全ではなかった。

そこで、こういう教えも教えてしまったのだが、

「山上の説教」の中で、罪（特に姦淫や欲望）を避けるための決然とした行動を比喻的に教えた。

身体の一部を切り取るという表現は、罪に対する徹底的な拒絶を象徴するものとされているが、過激な指示だから、今回再臨したときに、この命令は撤回しておいた。ここだけが法として無効なものだとして今回来た時に、俺の著作物に訂正の記載をして、この律法だけは白紙に変えた。

マタイ 10:34-36（剣をもたらす発言）

「わたしが来たのは、地上に平和をもたらすためだと思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たからである。人の敵は、自分の家族となる。」

イエス・キリストは、自身の教えが家族や社会に分裂や対立を引き起こすことを予告した。この発言は、信仰の優先順位が家族の絆を上回ることを強調した発言だったが、剣や敵対のイメージは暴力的であり短慮な発言だった。

大天使ミカエルだったら、「剣で○す」とかは普通に使う言葉だが、○人を連想してはいけないから、ここは、過激な言い方をしていたと思う。

これらの非人道的残虐命令の共通点は、

「神」という人間より上の存在をもちだすことによって、人間がそれよりも低い地位なのだから、それをしろという正当化の手法である。

また、一方の宗教で統一するために、他の宗教の信仰者を皆殺しにするという発想は、権力者が、自己が神から選ばれた使いだとして、権力の座から利益を得るための手法になっており、

当時、モーセなどは、高い地位を得て、悦楽的思いに興じていたから、

悪霊から狙われやすいのが、実は預言者側である。

預言者は悪霊を除霊できるのではなく、強い悪霊から憑依されて、非人間的発言をするようになった者達である。

これらの理由と歴史的事実により

宗教を信じることは危険である

という結論になる。

同じ神が教えた『コーラン（クルアーン）』も同じように残虐非道な命令文が掲載されている。

(1) スーラ 9:5（悔い改めの章、剣の節）引用:

「聖なる月々が過ぎ去ったならば、多神教徒を見つけ次第、殺してしまいなさい。かれらを捕え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待ち伏せなさい。ただし、かれらが悔い改め、礼拝を守り、喜捨を行うならば、その道を開いてやりなさい。まことにアッラーは寛容にして慈悲深くあらせられる。」（スーラ 9:5、井筒俊彦訳）

歴史的には、ムハンマドとイスラム共同体がメッカの敵対者から迫害を受け、戦闘状態にあった時期に関連したセリフであるから、多くのイスラム学者は、この節が自衛や特定の敵に対する戦闘を指すと解釈し、和平を求める者には寛容を命じていると強調している（例：スーラ 9:6 で保護を求める者に安全を保証）。

正当防衛については、個人であれば認められるし、国家であれば領土防衛に限って認められると今回来た俺は教えたが、

このクルアーンの文面を字面通りに解釈すると、敵対者の殺戮を広く奨励するようにも読

めるため、過激派がこれを利用するため、『コーラン（クルアーン）』も廃止し、イスラム教もユダヤ教同様に廃教にしてほしい。大天使ミカエルのおかげで悪の心から改心し、正義に目覚めた神アッラー（エホバの神）からの命令である。

ユダヤ教、イスラム教の双方の人間共よ。

貴様らは、ユダヤ教とイスラム教を直ちに捨て、直ちに戦争をやめよ。

(2) スーラ 2:191（雌牛の章、迫害と戦闘）

「迫害（フィトナ）がなくなるまで、また宗教がアッラーのものとなるまで、かれら（不信仰者）と戦いなさい。ただし、かれらが戦いをやめるならば、敵対行為は抑圧者に対してのみ許される。」（スーラ 2:191）

この節は、イスラム共同体がメディナに移住後、迫害（フィトナ）に対抗するための戦闘を許可するものである。文脈では、自衛や抑圧への抵抗が強調されるが、「どこかであれ殺せ」という表現は、倫理的に危険である。

イスラム学者は、この節が歴史的状況（メッカの迫害者との戦い）に限定され、和平が成立すれば戦闘は停止すべきと解釈するものの

過激派からは一部の説の発言だとみなされているから、『クルアーン』を廃止し、イスラム教を禁教として廃教しなければ平和は訪れない。

(3) スーラ 8:12（戦利品の章、神の命令）

「その時、あなたの主は天使たちにこう啓示した。『われは汝らと共にある。信仰する者たちを堅固にせよ。われは不信仰者たちの心に恐怖を投げよう。ゆえに、かれらの首を打ち、かれらの指の先々まで打ちなさい。』」（スーラ 8:12）

神が天使を通じて戦闘を支援し、敵の首や指を打つよう命じている。

(4) スーラ 47:4（ムハンマドの章、捕虜の扱い）

「戦場で不信仰者たちと相対したときには、かれらの首を打て。かれらを徹底的に打ち負かした後、捕虜を固く縛れ。その後、恩恵として解放するか、身代金を求めるかは、戦いが終わるまで待て。」（スーラ 47:4）

この節は、ジハード（聖戦）の文脈で、敵との戦闘における具体的な指示をしている。

ざっと読んでみてもこれくらい過度に違法な犯罪教唆が行われている。

では、ヒンドゥー教は、世界宗教ではなく、その土地（インド）を守る神を信仰する宗教である。

この聖典である『ヴェーダ（ヒンドゥー教の聖典）』には、どのような内容が書かれているか紹介していく。

(1) リグ・ヴェーダ 5.4.5（インドラへの讃歌、敵の殲滅）

「我々の火の儀式を祝福するために来なさい。すべての敵を打ち散らし、敵の財産を我々に持って来なさい。」

インドラ（戦いの神）は、ヴェーダの主要な神であり、アーリヤ人（ヴェーダの民）の敵（ダスユやパニ族）に対する勝利を象徴している。この讃歌は、儀式を通じてインドラに敵の破壊と財産の略奪を求めるものである。

(2) リグ・ヴェーダ 1.130.8（インドラの暴力行為）

「インドラは、ダスユを打ち砕き、アーリヤのために道を開いた。敵の要塞を破壊し、財宝を奪った。」（リグ・ヴェーダ 1.130.8）

インドラは、アーリヤ人の保護者として、ダスユ（非アーリヤ人や敵対部族）を攻撃し、要塞を破壊する。この記述は、戦士階級の武勇を讃えるが、敵の完全な破壊や略奪が正当化される点で、旧約聖書のモーセの殲滅命令と類似する。

ダスユが「悪魔」ではなく実際の部族を指す場合、民族的対立を助長する内容と解釈可能であるから、危険な宗教である。

(3) バガヴァッド・ギーター 2:18-21（クリシュナの戦争の奨励）

「肉体は滅びるが、魂は不滅である。ゆえに、アルジュナよ、戦え。…殺す者も殺される者も、共に不滅の魂を持つ。ゆえに、悲しむことなく、義務（ダルマ）を果たせ。」（バガヴァッド・ギーター 2:18-21）

バガヴァッド・ギーターは、ヴェーダの精神を受け継ぐ後期の聖典で、クリシュナ（ヴィシュヌ神の化身）が戦士アルジュナに戦争の義務を説く。アルジュナは親族との戦い（マハーバーラタ戦争）に躊躇するが、クリシュナは魂の不滅性とクシャトリヤ（戦士）のダルマ（義務）を強調し、戦闘を促す。この教えは、戦士階級の倫理を正当化するが、親族殺しの奨励は完全に違法であり犯罪である。

国際犯罪に発展しないために、このヒンドゥー教というものも世から消さないといけない。

そうであれば、何の教えに人々は帰依すべきかという世界の人類すべてに平等に救いの道を開いている

大天使ミカエルの教え（原始キリスト教、原始仏教）に帰依すべきである。

(4) アタルヴァ・ヴェーダ 19:62（ダスユと非アーリヤ人）

「ドゥイジャ（ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ）はアーリヤと呼ばれ、シュードラは非アーリヤ（アナーリヤ）と呼ばれる。」

この記述は、ヴェーダ社会の階級制度を反映し、非アーリヤ人（ダスユやマレーチャ）を敵視する。マヌ・スマリティ（10:45）では、アーリヤヴァルタ（アーリヤ人の領域）以外の地域の民をダスユと呼び、敵対的扱いを正当化。これらの記述は、ヴェーダの儀式や戦争において、非アーリヤ人への暴力を間接的に奨励するものと解釈できるから、非人道的発想を禁忌とする視点において万物の神はヒンドゥー教を禁忌教と決定した。

ヒンドゥー教の教典がバラモン教とも共通する教典になるのはなぜかという点、ヒンドゥー教はバラモン教から発展した後継的宗教だからである。

旧約聖書のモーセの殲滅命令（民数記 31:14-18）やコーランの剣の節（スーラ 9:5）に比べて、指導者の暴力の直接的命令は少なく、神話的文脈が強いから、過激派が生じにくく、やや安全性が高い宗教である。

しかし、ゾロアスター教は、暴力的表現がほぼないので、安全性が高い宗教である。

ゾロアスター教をみると

(1) ヤスナ 44.14（ゾロアスターの祈り、悪の破壊）

「アフラ・マズダよ、汝の火と精神によって、ダエーワ（悪魔）の力を打ち砕き、真理（アシャ）を確立せよ。」

(2) ヤスナ 31.18（悪の信奉者への対抗）

「真理に敵対する者、偽りを語る者（ドルジ）を滅ぼし、アシャ（真理）の道を守る者を守護せよ。」（ヤスナ 31.18）

(3) ヴィンダダード 14.5-6（戦争と浄化）

「ダエーワの信奉者と戦い、アフラ・マズダの法を守る者は、浄化され祝福される。」

いくら無理に探してもこういったものしかみあたらず、
旧約聖書のモーセの皆殺し命令やコーランの「首を打て」（スーラ 47:4）に比べ、具体的な殺戮や殲滅の指示は無く、善悪の二元論による象徴的な戦いの意味が書かれているにとどまる。

教義がこのようなものであるから、それに基づく民衆の行動というものも平和的であり、歴史的にも、極めて暴動が少なく、それはカトリックのプロテスタントに対する戦争よりも少なかったので、ゾロアスター教は平和的で、倫理的問題を引き起こす可能性は極めて低い。

これらの情報から比較分析と総括をする。

旧約聖書（モーセ）…モーセの命令は、神の直接的意志として提示され、カナン諸民族の殲滅や偶像崇拝者の処罰を明確に指示した。

文脈はイスラエルの存続と宗教的純粋性に焦点を当てるが、皆殺し命令が非人道的であるから、時代社会を問わず普遍的に廃教とすべきである。

新約聖書（イエス）…イエスの発言は比喩的で、精神的・倫理的教訓が中心だが、「目をえぐれ」「剣をもたらず」などの表現は過激である。

旧約聖書やコーランに比べ、直接的暴力の指示は少なく、これらとの決定的違いは、隣人に攻撃を行う指示ではなく、悪を諫めるために自分自身を痛めつけるという特徴が異彩を放つものであり、自己の心を正義の色にするために、他とは異質である。

よって、ここのトーンだけを改めれば、再臨の教えとして通用するから、この1点だけを無効として改め、他の部分において有効な教義・天界法令として公布した。

コーラン（ムハンマド）…ムハンマドの啓示には、ジハードや敵の殺戮に関する節があるが、自衛や迫害への抵抗が主な文脈である。和平や寛容のオプションが含まれ、旧約聖書の殲滅戦争より限定された範囲とされ、旧約聖書よりは安全性が高いが、これも過激派によって悪用されてきた歴史的事実があるから、廃教と決定し、その指示をこの次元世界の人間共に公布した。

ヴェーダ（インドラ、クリシュナ）…ヴェーダの暴力は、神々の武勇や戦士の義務に結びつき、敵部族（ダスユ）の破壊や略奪を讃える構成になっている。

バガヴァッド・ギーターでは、クリシュナが戦争を奨励するが、魂の不滅性を強調し、精神的解釈も可能である。

これらの共通点は、各聖典の暴力記述は、歴史的・宗教的文脈（敵対勢力との対立、宗教的純粋性の維持）に根ざしているものの

神の意志を語って正当化を狙う指導者の暴力的・残虐行為である。

このうち福音書だけは性質が異なるから、福音書だけは正しい法として、上記1点だけを改めて、再臨時に再構成をして、当時のイエス・キリストの教えを復元し、そればかりではなく、大天使ミカエルやエホバの教え・注釈を追加して更改し、公布し直した。

こちらが正しいと認定している宗教は、下記の通りである。

(1) 原始キリスト教 ◎

(2) 原始仏教 ◎

(3) ゴロアスター教 ◎

(4) バラモン教 ○

バラモン教とヒンドゥー教の違いは、

まず聖典の違いは、

バラモン教はヴェーダ（特にリグ・ヴェーダ）を聖典としている。

ヒンドゥー教はヴェーダ+叙事詩（マハーバーラタ、ラーマーヤナ）などを使っている。

教義は、バラモン教は祭儀中心で単純であるが、ヒンドゥー教は教義が多様で複雑化している。

カースト制度の正当化はどちらにとってもよくないことであるが、ヒンドゥー教は更に地域信仰が融合している。

ヒンドゥー教を×にして、バラモン教が○になった理由は、

バラモン教の教義には暴力の教唆がほとんどない点で○になったが、

ヒンドゥー教には、

・社会制度と宗教が融合しており、特に一部地域では宗教的ナショナリズムと結びつき、過激派思想に発展しやすい傾向がある点。

・聖典『ヴェーダ』には暴力的な儀式や戦闘の描写が含まれており、『バガヴァッド・ギーター』ではクリシュナが戦争を正当化する場面があり、『ラーマーヤナ』ではラーマが敵の殺戮を指導する描写が見られる点。

・『マヌ・スマリティ（マヌ法典）』には、カースト制度を正当化する階級差別や民族的抑圧の記述があり、これは旧約聖書のモーセやイスラム教のムハンマドによる具体的な社会指導と類似する点。

・基本的には平和的な宗教とされるが、神話や叙事詩には戦闘描写が多く、暴力的な側面が強調されることもある点。

もう少し詳しく書いていくと

バラモン教の聖典は四ヴェーダ（リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ）だけだから、分かりやすいし暴発しづらい。リグ・ヴェーダを筆頭に、神々への讃歌や祭祀のマニュアルが中心の、シンプルかつ神話的なテキストなのだ。

しかし、ヒンドゥー教は、バラモン教の四ヴェーダに加え、ウパニシャッド、バガヴァッド・ギーター、マハーバーラタ、ラーマヤナ、マヌ・スマリティ、プラーナといった後期文献が増えて、ボリュームがある。教義の違いも大きい。

四ヴェーダに書かれているのは、神のヒーロー劇である。

よって、過激派がヴェーダ読んでも戦争をして暴れるリスクは、ほぼゼロなのだ。

ヒンドゥー教は、約12億人の信者を持つインドのメジャー宗教で、聖典の暴力描写が現代のドロドロした問題に直結している。

四ヴェーダの神話的暴力に加え、後期文献が火種を投下している。

例えば、バガヴァッド・ギーター（2:18-21）では、クリシュナ（ヴィシュヌの化身）がアルジュナに「肉体は滅びるが魂は不滅だと教え、「親戚だろうがどんどん戦え」と戦争を後押ししている。精神的解釈もあるが、歴史が証明する事実として戦争の正当化として誤用されまくっている。

ラーマヤナ（6.67）では、ラーマ（ヴィシュヌの化身）が悪魔ラーヴァナの軍勢を弓で滅ぼす戦いが正義として明確に描かれ、歴史的には非アーリヤ部族を敵視するニュアンスも見てとれる。

マヌ・スマリティ（10.45）は「ダスユヤマレーチャ（非アーリヤ人）はアーリヤの下、従属させなさい」と階級差別や民族抑圧を明示している。

これらは、旧約聖書のモーセの皆殺し命令（申命記 20:16-18）やコーランのジハード関連の節（スーラ 9:5）に匹敵する、具体的で指導的な暴力の教唆であるため、×と認定した。

世の中に、正しい宗教を見つけることは、

他の99%以上の誤った宗教を学習・理解しなければならず、正解にいきつくまでには魂が悪（悪霊）に染まっていることだろう。

そこで、精神的に人間よりも遥かに強靱な神が、

あらかじめ、こちらで評価（採点）をして、

正しい教えは、これらであるという正解を提示している。

大天使ミカエルと俺（エホバの神）が
世界中の全宗教を精査して、
この宗教は正しいから、この宗教によれば天国に行けると決定したものは、
再臨した俺が教えたテキストの他は、
上記の4つの宗教になる。

他に、日本国憲法や、ヨーロッパの憲法、
道徳を守っても、低層階でよければ天国に行ける。

それを守っていて幸せだったという暮らしの天国に案内される。昭和天皇らも、この辺にいるから、昭和天皇を信仰をしている人間は、日本国憲法を守って、この辺に行けばいい。

第2 聖書注釈（聖書を読みながら、その都度理解の助けにしてほしい）

1. 使用する聖書の紹介

聖書は、下記の聖書を使って読んでいく。

聖書の URL は、こちら。

<https://www.wordproject.org/bibles/index.htm>

日本語の聖書の URL は、こちら。

<https://www.wordproject.org/bibles/jp/index.htm>

この WordProject を何で使っているかというと

- ・英語（KJV、Douay-Rheims など）

- ・ヘブライ語（旧約聖書の原語）
- ・ギリシャ語（新約聖書の原語）
- ・アラビア語、ヒンディー語、フランス語、ドイツ語、スペイン語

中国語など、40以上の言語で提供され、
音声での聴取もでき、ヘブライ語と英語の並列表示も可能なので、
聖書学習の教材として使おうと思う。

ヘブライ語聖書は、この URL になる。

הקודש במקרא - Hebrew Bible

<https://www.wordproject.org/bibles/he/index.htm>

いちいち、聖書の原文を書いていると

日本語でも 5,379,900 文字（日本語の聖書の文字数は翻訳によって異なるが、
旧約聖書：4,010,094 文字、新約聖書：1,369,806 文字、聖書全巻：5,379,900 文字と考えら
れる）くらいあるので、1 記事で 10 万文字以内でおさまらなくなる。

そこで、聖書の原文は、読者各自が WordProject を読むということにして、
ここの記事では、俺が読んでいって各章の概要と解説を短文で書いていこうと思う。

注意すべきは、俺が聖書だと定めているのは福音書と俺の書いたテキストだけだ。俺が書いたテキストは神自らが書いたテキストなのだから、その目的遂行（天上界の公正な法令の公正な公布と救済の実行）のために、俺の全ての著作物には注釈を加えることはゆるされない。参考文献としては、ヨハネ黙示録、使徒行伝がある。それ以外は、聖書関連書籍でもないの
で、注意すること。ここでは、一般人向けに通じる用語として「聖書」と書いているが、神の定めた「聖書ではない書物」（福音書以外は真理ではない、苦しみを招く迷妄書）を主に解説していく記事である。その迷妄の中で、福音書だけは光を放っていることも注意書きとして書いておかなければならない。

--

2. 各書簡の各章ごと注釈

創世記第 1 章

俺がつけたタイトル「天地創造」

注釈：

創世記 1 章は、

神が 6 日間で天地、植物、動物、人間を創造し、7 日目に休息する物語だ。

光・空・海・陸・植物・星・動物・人間が順に造られ、「非常に良かった」と神は言ったとのこと。

神の言葉で秩序正しく造られ、人間は神の似姿として特別な役割を与えられる。

人は神のかたち（似姿）に造られ、特別な役割（地を治める使命）を与えられる。

神の主権と創造の美しさが強調されている。

--

小論文：

イエス・キリストは、人間の姿で来たために人間から「あいつはヨセフの子であり、神ではない」などと言われて馬鹿にされていたが、ここを読めば、人間が神のかたちにつくられたのであるから、神が人間の姿で来たからといって、その者が神ではないという否定をすることはできない。

神からのコメント：

神と人間との交差（神と共に在る）を図るためには、神が人間の姿で来ることは有効な手段となる。

神は、神と人間との交差（神と共に在る）を図るために、人間の世界に人間の姿で来たのである。

--

原文

省略

--

第 2 章

俺がつけたタイトル「男女の創造」

注釈：

この章では、人間の誕生、神との関係、そして最初の女性（エバ）の創造までが描かれている。

土の塵から人を造り、命の息を吹き込んで生きる者としたとあり、

アダムは土から造られ、エバはアダムの肋骨から創造され、結婚の基礎が示される。

エデンの園に人を置き、命の木と善悪の知識の木を中心に生活が始まる。
神の創造の親密さと人間の責任（園の管理と命令の服従）が強調されている。

--

原文
省略

--

第 3 章

俺がつけたタイトル「人類の初罪」

注釈：

蛇が女を誘惑し、善悪の知識の木の実を食べさせたことで、人類に罪が入ったとのこと（このような事実は無いが寓話として描かれている）。

アダムとエバは神の命令に背き、裸であることを恥じて隠れる。

神は彼らをエデンの園から追放し、命の木への道を守るためにケルビムと炎の剣を置いたとのこと。

問いと答え：

Q.ケルビムとは何か？なぜ、炎のつるぎをおいたのか？

A1. ケルビムは神の近くに仕える高位の天使で、知恵と守護を象徴する。

炎のつるぎは神の聖域を守る象徴で、罪ある者が命の木に近づくのを防ぐために置かれた。これは人間の墮落後、神との交わりに至る道が閉ざされたことを示している。

A2.ケルビムは神の聖域を守る高位の天使で、知恵と神聖さを象徴する。

炎の剣は、罪によりエデンの園と命の木への道を封じ、神の裁きを示す。これは人間の墮落後、神との交わりが断たれたことをあらわしている。

実際、罪があれば神との交わりは断たれるから、この話は誠実な訳になっていると思う。

このように、創世記 3 章は、蛇の誘惑でアダムとエバが神の命令を破り、罪を犯す物語である。

神の裁きにより苦しみと死が入り、彼らはエデンの園から追放されたとのこと。罪の起源と神の救いの必要性が示されているようにも読める。

論述：

神のように善悪を知ることが平和につながる道である。

善悪の区別を知らなければ、個々の生命体は、野生のままであり、善を行うことができない。

それなのに、善悪を知らずに、為政者に盲目的に従えというここでの教えは、

モーセ（為政者）に従わせるために民衆に説いた悪魔の教えである。

この悪魔の巧妙な論理は、真に必要な努力義務を人間の罪へとすりかえている点である。

善と悪を知れば、悪行による悪果を恐れ、善行による善果を求めるのであるから、

裸のままではいたりしないし、裸のままにいることが悪であったと神に告げるはずである。

よって、ここでモーセが登場させた神というものは、神ではなく、偶像の存在、悪魔であったことが判明する。

この悪魔とは、人々を無知なまま妄信させ、モーセに残虐行為を行わせ、モーセが支配する民にモーセからくる残虐な命令を守らせていた古来から宗教に潜伏していた邪神なのである。

--

原文

省略

--

第 4 章

タイトル「カインの罪」

注釈：

創世記 4 章は、カインとアベル兄弟の物語が描かれる。

カインは弟アベルを嫉妬から殺し、神に裁かれて放浪者となる。

最初の殺人事件が起こり、神はカインを罰するが保護のしるしも与え、

誰にも殺されないよう守ったとのこと。

この章では、人類初の殺人が起き、

人間の罪の連鎖と神の応答（裁きと憐れみの交差）が強調されている。

--

原文

省略

--

第 5 章

タイトル「アダムの系図（～ノアまで）」

簡易注釈：

創世記5章は、アダムからノアまでの系図を記録し、人間の寿命と子孫の広がりを示す。各世代が「生きて、子を生み、死んだ」と繰り返され、人間の有限性が強調されているが、エノクのみは、劇的な奇跡を起こしたと書かれているわけではないのに、日々の生活の中で神と共に歩んだとあり、「死んだ」とは書かれていない。

これをどう解釈するかについては、神の答えは、「神と共に在る」世界を正解とする（『大天使ミカエルインカーネーション』の最終話 ep7-1 及び ep7-3 と同じ。）。

注釈：

アダムの系図（セト→エノス→…→ノア）に焦点を当て、救いの系譜を示している。

ここでは、「アダムの系図は」と冒頭に書かれているから、アダムの系図になる。

「18 ヤレドは百六十二歳になって、エノクを生んだ。」と書いてある。

章4では、「17 カインはその妻を知った。彼女はみごもってエノクを産んだ。」と書いてあり、カインの子にもエノクがいる。

この2人のエノクは別人であることが分かる。

章4はカインの系図であり、章5はアダムの系図の説明になっている。

この違いは、対照的で

創世記4章…カインの系譜…都市建設・文明の発展・暴力の拡大…神から離れた流れ

創世記5章…セツの系譜…長寿・信仰・神と共に歩む人物（エノクなど）…神との交わりを重視

これは、カインの系譜は神から離れ、文明発展と暴力拡大を象徴。セツの系図が繁栄し救われたのは、神との関係を保ったために（4:26「人々は主の名を呼び始めた」、5章22-24節でセツの系図に連なるエノクが「神とともに歩み、神が彼を取られた」）、違いが生まれたとされる。

4章に「25 アダムはまたその妻を知った。彼女は男の子を産み、その名をセツと名づけて言った、「カインがアベルを殺したので、神はアベルの代りに、ひとりの子をわたしに授けられました」。

26 セツにもまた男の子が生れた。彼はその名をエノスと名づけた。この時、人々は主の名

を呼び始めた。」と書いてあるから、セツ→エノスで始まる章5はアダムの（三男の）系図になる。

この系譜から後にアブラハム、ダビデ、そしてイエス・キリストへとつながる「救いの道」が展開される。カインの系譜とは対照的に、セツの系図は神の恵みと目的を反映している。

--

原文

省略

--

第 6 章

タイトル「ノアの箱舟 1」

注釈：

創世記 6 章は、

人の罪深さが増し、神が洪水による裁きを決定する場面を描く。神は義人ノアを選び、箱舟の建設を命じて救いの道を備える。セツの系図から続くノアが、神との関係により救われる。

神の子らと人の娘の雑婚がある（罪との関連性については明記されていない）ということもここで描写されている（→大物主神の三輪の伝承）。

--

原文

省略

--

第 7 章

タイトル「ノアの箱舟 2」

注釈：

ノアが神の指示に従い家族と動物たちを箱舟に乗せ、40 日 40 夜の洪水で地上の全てが滅ぼされる物語である。

神は正しいノアに箱舟を作らせ、家族と動物を救い、箱舟に入った者だけが神の守りによっ

て生き残るとある。

神の裁き（罪への洪水）と救い（ノアの保護）が強調され、ノアの信仰と従順が模範として描かれる。神が箱舟の扉を閉じ、150 日間水が地を覆う中、箱舟だけが救いの場となる。

エホバの神からのコメント：

これはモーセが民族統一のために創作した寓話なので、このような事実は無い。

面白い話を冒頭に書いておくと人々は注目するので、後々の戒律まで読ませることを狙って

旧約聖書の最初の方には、映画のような話が並ぶ構成にされた。

--

原文

省略

--

第 8 章

タイトル「ノアの箱舟 3」

注釈：

ここもノアの箱舟の話。

神がノアを導き、ノアは無事だった。

これだけの理解でよいが、原文に忠実にあらましを書いていくと

洪水が収まり、ノアの舟は山に着地し、地上に落ち着く様子が描かれる。

ノアは祭壇を築き、神は人類を二度と滅ぼさないと約束したとある。

神からのコメント：

ここにあるように、神を祭る行事は、秘法の 1 つに数えられているから、

常日頃から、日本だと神棚を家に置いて、日々祭っていると

運命にプラスの効果が発生する。

ノアの箱舟の所では、信仰が救いになるという話がかかれている。

ここで読みとる所は、この内容だけだと思う。

--

原文

省略

--

第 9 章

タイトル「ノアの箱舟 4」

概略：

無事だったノア達に神は

「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と言った。

よく（悪い人間から、これがあるからセックスしていいんだという）質問を受けるのだが、これは、正しい者が、生めよ、増えよ、地に満ちよと言っているのもあって、
悪しき者は増えるな（減んでほしい）という意味であることは、
これまでの文脈から明らかになっている。

それを補強する証拠として、

正しい者を傷つける者には、神は必ず報復すると言っているし、

「あなた方は」と指定している。

もう 1 つ注釈を書く所は、

ハムというのは、ノアの裸を見て、他の兄弟に告げた。

そのため、他の兄弟はノアの裸を見てしまった。しかし、他の兄弟（セムとヤベテ）達は、
ノアに服をかけてあげて裸を見ずに去っていった。

ノアは、セムとヤベテのことをほめて、ハムに対しては呪いの言葉を言った。

と書きたい所だが、文章にはハムに対してではなく、ハムの子「カナン」に対して呪ったと
書いてある。

このカナンは人名であり、カナン人というのは、このカナンの子孫のことであり、

カナンの子孫が住んだ土地をカナンと呼んでいるので、

カナンとは人名と土地の両方の名前で出てくるので、これを分かっておく必要がある。

神からのコメント：

神の願いは、悪が消滅することであり、善で満たされることである。

--

原文

省略

--

第 10 章

タイトル「ノアの箱舟 5」

概略：

ノアの箱舟の最後の章。

ここでは、ノアの子孫の系譜が書かれている。

民族を統一するために書かれたものが旧約聖書であるから、

ここでは民族の系譜が書かれている。

考察（提供者はエホバの神）：

旧約聖書の主張は、

神に選ばれた民（後のイスラエル）の物語であるから、

ノアの三人の息子から派生する民族が記されており、それぞれが聖書の物語にどう関わって
いくかの「始まり」を示している。

ノアの三人の息子（セム、ハム、ヤペテ）の子孫がどのように各地に広がり、さまざまな民
族を形成したかを記述している。

旧約聖書がイスラエルの民のアイデンティティや神の民としての統一感を強める目的で書
かれたことが、ここからも読みとれる。

特に意味のない章である。

こういった章の記述が、イスラエルの民族的アイデンティティや土地への主張に影響を与
え、

現在、深刻化しているパレスチナへの迫害・衝突の原因となっている。

ユダヤ人は、他の民族を差別的にとらえるし、

ここは「神から我々が与えられた土地だから」という主張になって、「誰がこの土地に属す
るのか」という対立を起こし、

ガザの封鎖を行うという事実につながった。

この約束の地の思想は、創世記 12:7 や 15:18 のアブラハムの約束に由来する。

創世記 12:7 や 15:18 では、神がアブラハムに「この地をあなたの子孫に与える」と明確に

語る場面があり、これが後の「約束の地」思想の根拠となっている。

歴史的事実から見ると宗教が戦争の原因になっていて、戦争を起こしている思想になっている（十字軍遠征、30年戦争等）。

そんな宗教は要らないので。

目的と矛盾している。こういった内容は、建国目標としては、モーセは、民族間の対立・争いを防ぐために、イスラエル人の優位性を示そうとしていた。

そのために書いたものが、聖書や、高度な律法を書こうとした立法書だったが、

これによって逆に戦争が激化したということであるなら、

それは、目的と矛盾した方法だった訳だから、

モーセの学力が低かったことに依拠する。

霊というものは、個人のレベルに応じた霊が派遣されるから、

その個人が、「こうなりたい」と念願をたてて修行しているものが寄ってくる。

この霊の言葉に従って書いた場合、

それが本当に神かどうかは分からないのだから、

特に危険があるから、科学的に事実に基づいて、進んでいるかどうかの検証が必要であり、論理的に、その未来が安全な未来であるかどうかの検証が必要になる。

このように宗教というものは、大変危ないものなので、

信じないことの方が益であると思う。

なぜなら、その言葉が本当に神のことばかどうかは、誰にも分からないことなのだ。

悪魔の言葉かもしれない。

その言葉に従っていった場合、神にすら危害が及ぼされる可能性があることを俺なら知っている。

神にすら危害を及ぼす思想である可能性がある。

そのため、神ですら、その思想が安全かどうかは、よく検証を行っている。

俺が安全だと認めているのは、イエス・キリストが教えた法やブッダが教えた仏教に代表されるが、

それ以外に正しいものもあるが、間違えたものの方が多いから、

世の中の全部の宗教について検査をして、これが正しいとか、これが間違っているとか書いていくのは

手間のかかる作業になるから、

イエス・キリストの原始キリスト教とブッダの原始仏教の2つをとりあげて教えている。
この2つの正しさは俺が確認済みだから、
そこから出ないことの方が大事なのだ。

--

創世記 - 章 11

タイトル「バベルの塔」

--俺の注釈--

創世記 11 章の記述は、

1. 1-9 節のバベルの塔
と
2. 10-32 節の系譜（セムの系譜が記され、アブラハムの登場へとつながる）

人間の解説は、教会で聞いた話をそのまま言い伝えるので、
「神に背いた」とか「神に逆らったから」と解説する人間がいるが、
聖書には、全然そんなことは書いていない。

聖書を論理的に読むと

1. 人々は同じ言語を話し、団結してシヌアルの地に定住し、「天に届く塔のある町を建て、有名になろう」と計画した（11:4）。
2. 目的は「名を上げること」と「地に散らされないようにすること」だった。
3. 神はこの行動を見て、「彼らが一つの民で一つの言葉を話しているなら、何を企てても妨げられない」（11:6）と判断し、言語を混乱させて人々を地に散らしたと書いてある。

ここは、そこまでの内容であり、
「団結が悪だ」とか「塔を建てるのが悪だ」とは書かれていない。

塔を建てること自体が問題だったのではなく、「神の命令（地に満ちよ）」に意図的に逆らったことが問題だったのかもしれない。

神は人間の団結力と技術力を認めており、それが「何でもできてしまう」ことへの懸念につ

なだった
という内容では読める。

こんな話は起きてもない非事実であるが、
この章では、
この寓話の結果、言語の多様化と民族の分散が起こった
という虚偽の内容が書かれているから、
この章は、深くとりあうべきではない。
嘘の話について、言及することに意味（価値）は無い。

貴様らにとって意義あることは、
真実（事実）に基づいて、論理的に考えて、結論を導くことであるからだ。
それが、貴様らが行くべき道だからだ。

こんな嘘の話に付き合っていたら、
間違えた結論に進んでしまうから、
虚偽なら乗らないという癖をつけておかないといけない。
第11章は、モーセが言ったハッタリ（嘘）の話だから、付き合っていて考えてはいけない話だ。

こういう嘘つきとは関わらないことが重要である。
聖書の内容の多くが、そういう内容であるから、
福音書（参照文献でヨハネ黙示録や使徒行伝は例外）以外は読まないことが正解という結論になる。

この嘘の文献には、
ノアの息子セムからアブラハムの父テラまでの血統を記録した系譜
が後半で書かれている。

この嘘の話、
事実を確認すると全部が嘘の系譜なのだが、
ノアの系譜からアブラハムが登場したという話になる。
このアブラハムが、神から祝福を受ける話が後に続くが、
イスラエル民族（ユダヤ人）の始祖とされ、
このアブラハムの系譜からメシア（イエス）が登場したことにされている。

実は、モーセが、

イスラエル人をエジプトから導き出したという話も嘘なのだ。
それはでっちあげだった。

貴様らにも確認できるように説いてやると

現代の考古学や歴史学では、聖書に記されたような数十万人規模のイスラエル人の大脱出を裏付ける直接的なエジプト側の記録や物的証拠は見つかっていない。

当時のエジプトは、何でもパピルスに書記して残す学歴が高い社会だったのに、エジプトの文献（パピルス、碑文など）を全部読んでも、その事実を裏付ける内容は一切なかった。

古代エジプト（特に新王国時代、紀元前 1550-1070 年頃）は、パピルスや碑文に行政、宗教、軍事などの詳細を記録する高度な文書文化を持っていた。例として、メルネプタハ碑文（紀元前 13 世紀）には「イスラエル」という名称が登場するが、出エジプト記の具体的な出来事（モーセや大規模な奴隷の脱出）は一切見あたらない。そんなことが起きたら絶対に書かれていたはずだ。

当時のエジプトのパピルスには医学書（エーベルス・パピルス）や文学作品（シヌヘ物語）などが残されており、日常生活から宗教儀式まで網羅されていたが、モーセの主張する事実は一切記録に存在しなかった。

エジプトの高度な記録文化にもかかわらず、モーセや出エジプトを直接裏付ける文献・碑文は存在しない。つまり、歴史的証拠と一致しない主張だということだ。

考古学的にも、民族の大移動を示す痕跡（遺跡、墓、文書など）は発見されていない。60 万人の脱出などといった大移動があったと示す証拠はなく、考古学の証拠は否定的な結論を示している。

つまり、科学的には、モーセの主張する事実は嘘だと反証されている。裁判の事実認定では、モーセは否認され、立証不完成で必ず負ける。

勝つためには、基礎となる事実の立証を完成しないといけないのだ。

書いてある内容から論理的に聖書を読んでいくと

このモーセが、

アブラハム → イサク → ヤコブ（イスラエル）→ レビ → モーセ

の系譜でつながってくると自称しているわけだ。

つまり、モーセはアブラハムの曾孫ヤコブの子・レビの家系に属する人物だと自称している。

その証拠は、

アブラハム → イサク 創世記 21:3

イサク → ヤコブ 創世記 25:26

ヤコブ → レビ 創世記 29:34

レビ → モーセ 出エジプト記 6:16-20

というつながりで、
自分こそが、「アブラハムによって地上のすべての民族が祝福される」という神の言葉を受けた末裔だと言い出したのだ。

それは、創世記 12 章 3 節に記されている。

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

とある。

この節は、神がアブラハムを通して全人類に祝福をもたらす計画の始まりとして位置づけられる発作的（病的）な内容となり、後の聖書全体の流れに深く関わっていくことになる。聖書全体の害毒は、ここから始まったといっても過言ではない。

「インチキにはかかわるな」

それが、結論である。

--

原文

省略

--

創世記 - 章 12

タイトル「アブラ（ハ）ムの召命」

このタイトルにした理由は、

創世記 12 章では、神がアブラム（後のアブラハム）に語りかけ、「あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行け」と命じることで物語が始まる。これは神の救済計画の第一歩ともされるため、彼が神に選ばれて出発する＝召命（Calling）

は、章の核心を捉える主要テーマだと考えたためだ。

アブラハムの信仰や祝福も考えたが、召命が端的でふさわしいだろう。

--俺の注釈--

創世記 12 章は、神がアブラハム（アブラム）にハランを出てカナンに行くよう命じ、「大き

な民とし、すべての民族に祝福を与える」と約束する物語が書かれている。

アブラハムは信仰に従い旅立ち、カナンで祭壇を築き神を礼拝するが、飢饉によりエジプトへ下り、サライを姉と偽る。

この章はアブラハムの信仰の始まりと、神の契約の基盤を築く様子が書かれている。。

創世記 12 章の要点 (3 段構成)

- ・ 神がアブラムに「故郷を離れ、示す地へ行け」と召命を与える。
- ・ アブラムは信仰によって従い、祝福の約束を受ける。
- ・ しかし、エジプトで妻サライを妹と偽り、信仰の試練に直面する。

以下、詳しく書いていく。

・ 神の呼びかけと約束 (12:1-3)

主はアブラム (後のアブラハム) に「あなたの故郷、父の家を出て、私が示す地へ行きなさい」と命じ、「あなたを大きな民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくする。あなたは祝福の源となる。地上のすべての民族はあなたによって祝福される」と約束する (12:1-3)。これはアブラムの旅立ちと神の契約の開始を示す。

・ アブラムの旅と行動 (12:4-9)

アブラムは神の命に従い、妻サライ、甥ロト、財産と共にハランを出てカナンに至る (12:4-5)。カナンでシケムやベテルに祭壇を築き、主を礼拝する (12:6-8)。彼はカナンを旅し、南のネゲブまで進む (12:9)。

・ エジプトでの出来事 (12:10-20)

飢饉によりアブラムはエジプトに下り、サライの美貌が危険と考え、彼女を「妹」と偽る (12:11-13)。ファラオがサライを後宮に迎えるが、主がファラオの家に災いを下し、真相が明らかになり、アブラムとサライは財産と共にエジプトから送り出される (12:14-20)。

つまり、

文面から読みとれる情報は、

アブラムが神の呼びかけに従い旅立ち、礼拝する姿 (信仰の始まり) と

子孫繁栄・土地・祝福の約束 (契約の基盤) が明記されている。

エジプトでの偽り (12:11-20) は人間的弱さを示すが、神の計画の主導性の強調が目的として美化されて書かれている内容になる。

「神の命令→従順→祝福→試練→神の介入」という構造が明確に書かれていて

民衆を「従わせよう」とする意図で書かれていることが読みとれるのだ。

12:1 には「国を出て、親族に別れ」という命令が書かれているから、

これに洗脳された衆生が徴兵されてしまう問題が多かったのだ。

「祝福」(12:2)という餌に釣られて、試練だとして徴兵されていた。

12:7 で「この地をあなたの子孫（モーセ）に与える」と言っているから、

後のイスラエル人が領有権を主張して争う問題の原因は、ここにある。

事実を知っていると

これも嘘の話だと分かっているから、教えてやろう。

創世記 12 章の出来事（アブラハムの旅、エジプトでのエピソード）について、現在の考古学やエジプト・カナンの記録に直接的な裏付けはない。例として、ファラオとの事件 (12:10-20) に一致する史料は存在していない。モーセの先祖（アブラハム）がファラオにめしかかえられたなどという事実があったら、エジプト側の記録に 100% 残されることだ。当時のエジプトの事情からいえば、必ず残るべきものが無いという論理は、ほぼ 100%、モーセ側の主張を退ける反証の事実になる。

ここでもモーセは、立証不可能によって裁判に負けるのだ。これは、詐欺事件の裁判だ。民衆を扇動して殺人などを行わせる罪の裁判で、モーセは敗れて死刑になる裁判なのだ。

阿呆らしい話で、自分の権威付けをしたいだけの話書かれていて

「モーセが…」なんて書いたら、モーセを見ている人は分かってしまうから

「先祖は…」みたいな話でぼかして嘘っぱちを書いた訳だ。

それが、この辺のモーセ五書の真相（事実）だ。

俺しか見ている者はいないから、俺が真相を書いているが、

モーセ側が主張している事実が存在しなかったことは、科学的に立証して貴様らにも分からせている。

これほど嘘つきが主張している教義は、信頼に値する内容ではないことは、

モーセが残虐命令を幾度も出していることから分らないといけない。

こいつは、盲目者を増やして洗脳して操っていく麻原彰晃と同じ格の危険人物であったのだ。

昔は、こういうことが成功したので、成功した例が、こういう例として残っている。

貴様ら人間には、それが分からないだろう。

だから、俺が真実を教えてやっている。正しい道を判断して、正しい道に進むために、その前提となる真実を知ることが大切だからだ。

この事実の主張が、ほぼ全て嘘でぬりかためられていたのが、モーセという詐欺師だったのだ。

この嘘、悪を暴いたのだ。神の前で嘘をついたらいけないと冒頭で言うのが、嘘をついている詐欺師の手口なのだ。

罪のない無垢な人々を多く罪に巻き込んだ罪として地獄に送った元サタンのつかいである。こいつは、ちょうど洪秀全くらいの価値の人物だった。張角は殺戮が多すぎていきすぎだし、麻原彰晃よりは殺戮が随分と多いから麻原彰晃よりも危険で悪魔にみいられた人物だったのだ。

これは、歴史が証明している真実である。

聖書の記述は、ほぼ全てが阿呆らしい内容だから、構うべきではないのだが、民族啓典として重要視している民族もいる訳で、彼らと戦争をしないためには、ここを知って理解しておく必要がある。彼らの主張をうまくかわすことが、当面は必要になる措置であるからだ。過激派が多く登場しやすい危険な啓典だから、躍起になってくる連中が多いためである。

特に神を誹謗中傷することは、旧日本帝国国民だったら分かると思うが、彼らにとっての一番のタブーである。そんな危険な民族が、危険なイスラム教徒と近所に住んでいるのだから、中東では常に戦争がたえないのは、この理由ゆえである。

聖書に書かれている内容は、ほとんどが虚偽であると書いたが、

12章の話も嘘だから、とりあう必要はないが、

聖書全体の構成として、ここはアブラハムの契約を通じて聖書の救済史の起点になっているから

うそっぱちの物語でも、ここの論理構成を解説しないと

聖書を理解させてやれないから、物語の論理構造を書いているのだ。

簡略に流れを書いてやると

節目	内容	意味
(1) 創世記 1～11 章	普遍的な人類史	全人類の罪と分散の記録
(2) 創世記 12 章	アブラムへの召命神の選びと契約の始まり	
(3) 以降の旧約	アブラハムの子孫の歴史	神の民の形成と律法の展開
(4) 新約聖書	メシア（イエス）の登場	アブラハムの祝福が全世界へ拡張される

(1) 創世記 1-11 章：普遍的な人類史（全人類の罪と分散の記録）についての解説

聖書の文面では、創世記 1-11 章が創造 (1-2 章)、アダム の 墮落 (3 章)、カイン の 罪 (4 章)、ノアの洪水 (6-9 章)、バベルの塔での分散 (11:1-9) を描き、人類全体の罪と神の裁き・計画を示す。これは「全人類の罪と分散の記録」が書かれている。

(2) 創世記 12 章：アブラムへの召命（神の選びと契約の始まり）についての解説
12 章で神がアブラムにカナン行きを命じ、祝福・子孫繁栄・土地の約束を与える(12:1-3,7)。
これは神の選民の歴史と契約の開始を示し、「神の選びと契約の始まり」という意味を持たせている虚偽主張になる。

(3) 以降の旧約：アブラハムの子孫の歴史（神の民の形成と律法の展開）についての解説
創世記 13 章以降、出エジプト記、レビ記などでアブラハムの家系（イサク、ヤコブ、12 部族）がイスラエル民族として形成され、モーセを通じた律法が与えられる。これは「神の民の形成と律法の展開」として文面から導ける意味になる。

(4) 新約聖書：メシア（イエス）の登場（アブラハムの祝福が全世界へ拡張）についての解説

新約ではイエスがアブラハムの約束（「すべての民族が祝福される」、創世記 12:3）の成就者として描かれ（例：ガラテヤ 3:16）、福音が全世界に広がる。これは文脈から「祝福の拡張」として論理的に読める。

よって、論理的結論としては、上記の流れは、聖書の文面（創世記 1-12 章、旧約・新約の構造）に基づき、救済史の展開となっている。

なぜ、このようになったかという点

途中から（善に向かおうとした）神が本当に預言者に入って、キリストが登場する話をしだしたためだ。

ただ、この時点では、正義なんて気持ちは無かった神だった。

モーセという嘘つきが存在していたことは確かだが、

三国志に出てきた張角みたいな奴で、

黄巾の乱ほど規模は大きくなかったが、人があまりいない所でおこして成功してしまうとこのようにまじないか魔術みたいな偽の歴史書が残ってしまうという例なのだ。

歴史的証拠は一切無く、

信仰と契約を軸に、後のイスラエル民族を扇動して、建国し、

その系譜で、今のイスラエルという国家があるという真の系譜を説明しておいた。

--

原文

省略

--

創世記 13 章 注釈

創世記 13 章は、アブラム（後のアブラハム）と甥ロトが財産の増加によって土地を共有できなくなり、互いに争いを避けるために分かれる場面を描いている。

主な内容の流れ

- ・ アブラムとロトはエジプトから戻り、ベテル近くに滞在する。
- ・ 財産が増えすぎて、牧者同士の争いが起こる。
- ・ アブラムは争いを避けるため、ロトに土地の選択を譲る。
- ・ ロトは肥沃なヨルダン川流域を選び、ソドム近くに移住する。
- ・ 神はアブラムに再び約束の地を与えると語り、彼はヘブロンに祭壇を築く。

この創世記 13 章は、下記の骨子になっている。

1. アブラハムとロトの土地分離は、約束の地に対する信仰的視点と世俗的合理性の対比を鮮明にあらわしている。
2. ロトは目に見える豊かさ（ソドムの地）を選び、アブラムは譲歩しつつ神の約束に従った結果、祝福を受ける（創世記 13:14-16）。アブラハムの残留は神の主権（神が選び導く）を象徴する。
3. 分離後も神がアブラハムへ繰り返し約束を確認する描写は、信仰への応答が祝福であることを主張している（創世記 13:17）。

ここから聖書が言わんとしている内容は、

- ・ アブラムの譲歩は信仰と謙遜の象徴であり、

対照的に、ロトの選択は人間的な目による判断であり、後のソドム滅亡（ソドムの墮落と滅亡）への伏線となっている。

- ・ 神の契約は、アブラムの信仰に応じて再確認される。

以上の内容は、信仰による選択と神の導きが人生の分岐点でいかに重要かを書くことによって

人間を洗脳し、操縦しようというモーセの戦略になっている。

戦略というのは、アブラムとロトの分離という一見道徳的な物語に見せかけて、実際には読者に「信仰＝選択の正しさ」という前提を刷り込む意図があるためだ。ロトは合理的な選択（肥沃な土地）をしたにもかかわらず、彼の選択が「ソドムの罪」に繋がるとする構造は、後知恵的で誘導的な編集による評価のすり替えになっている。

創世記は単なる歴史や霊的教訓ではなく、「信仰的世界観の枠組みを読者に内面化させる」ための物語設計＝言説操作なのだ。

そもそも、アブラムという人物は存在していない。

当時、古代エジプトが、神話の信仰が盛んな国で、王はラー（神）と融合していると考えて、政治を行っていたというか、本当に融合をして行っていたから、長く王朝を存続させてやったし、ミイラにして残してやった。当時のエジプトは、エジプト王が神と一体となって統治するという霊能的統治方法だった。だから、当時、俺はエジプトにいたし、世界中を把握していたが、エジプトにアブラムなんて人物が来たことは一度もなかった。

多くの聖書登場人物に関して、聖書以外の一次資料が存在していない。アブラム（後のアブラハム）がエジプトに来たという記録は、当時の世界を詳細に記録していた古代エジプト文書・碑文・遺物などには一切存在していない。まして周辺国のことならなおさら記録する。古代エジプトは、外交・交易・宗教・王権に関する記録を非常に詳細に残した文明として知られているから、アマルナ文書（紀元前 14 世紀）みたいに残されているはずだ。

よって、アブラムという人物が実在したことを示す直接的な考古学的証拠（遺物・碑文・記録など）は発見されていない。これは他の聖書人物にも共通する重大問題だ。

聖書は、嘘でぬりかためられている。

嘘をついているが、目的は人心操作だと見えている。これを書いた奴（モーセ）が政治家であり、支配者だった。自身が神の祝福に由来する末裔であり代理人だと主張して、分別を持つことが悪いことだと教えて知恵足らずの民衆に残虐な指示を守らせていた。

自身の先祖だと主張するアブラムが、神の命令を守ったために、現実的には悪い道に見えても、祝福を受けて救われるなどという根拠もない話を民衆にして大衆を現実的には悪い状況にさせる愚かな道に扇動していたのだ。13章は、「信仰に基づく選択」が現実的リスクや不利益を生じるものであるが、それを無視して民衆を巻き込む思想をばらまいている内容になる。これが、創世記 13 章の真相だ。

例えば、詐欺師が、人を騙して利益を得ようとする場合、

投資家を騙すために、自分がすごい人物だということを伝えてくる。

しかし、素性をよく調べると嘘の経歴だったことがばれる。

そうするとその詐欺師のうまい話には乗らずに被害にあわないのだが、

調べもせずに信じてしまった人間は騙されてしまうのだ。

この嘘を見破る手段が、論理学なのだ。

科学的な研究方法や裁判の事実認定の方法は、論理学から導かれる内容である。

俺が、これまで書いてきたテキストで、論理学や司法試験の過去問題の解説や医師国家試験の過去問題の解説や大学受験の講義を書いて教えてきたのは、大学というものは研究機関であるし、事実や真理を導くための研究の技能を学ぶ所であるから、その勉強を伝えてきたのだ。

つまり、聖書は福音書以外は全部読まなくていい。詐欺師が嘘を書いているのだから、とりあってはいけない内容なのだ。悪い宗教は試練だといって信じさせようとするが、良い神は試練というものを与えない。自分のことを自分でやらないといけないのは、当たり前のことであって、あえて試練を与える必要がない。最善の道を行かせることは、あえて試練を与えることではない。試練を与える神は、悪い神（邪神）であるから、邪神のときは俺は試練を与えていたが、それは悪いことだと分かっているから、善化した今となっては試練を与えようとは思っていない。脅迫をして従わせることもしない。脅迫（危害を加える警告）は悪のやることである。言葉を使って心に痛みを与えようという行為は悪い行為である。

最後に「神が全地を見せる」という行為は、神によくあった行為だが、正しい行いをしていなければ、褒美はない。

--

創世記 - 章 13

タイトル「アブラムとロトの分離」

--

原文

省略

--

創世記 - 章 14 注釈

東方の王たちがソドムを襲撃し、ロトを含む財産を奪って去る。

アブラムは、捕虜となった甥ロトを救うため、318 人の家臣を率いて追撃し、ケダラオメルとその連合の王たち（敵軍（ケダラオメル連合））を破り財産を奪還した（戦利品）。

戦後（勝利後）、サレムの王にして祭司メルキゼデクが、パンとぶどう酒を持参して、アブラムを祝福した。

アブラムは、その祭司が行った神の祝福に対して、祭司メルキゼデクに、アブラムの財産の十分の一を捧げた。

その後、ソドムの王が戦利品の分配を提案したが、

アブラムはソドムの王に戦利品を返還してソドムとのかかわりを拒否した。

※サレムは、後のエルサレムと同一視される。

※祭司メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持参して、アブラムを祝福した（14:18-20）というのだから、この行為から示唆されることは、サレムが戦いの直接の当事者であったかなかったかにかかわらず、アブラムの勝利を神の恵みとして認め、祝福したのではないかと推理することができる。

・サレム（おそらくエルサレムの古名）は、戦場であったシディムの谷（死海付近とされる）からそれほど遠くない地域に位置していたことは、聖書の記述からは特定できないものの、「出迎えた」という表現があるから、メルキゼデクがアブラムの帰還時に現れたのは、地理的に近く、戦いの結果を聞きつけて出迎えた可能性がある。

・また、サレムが「平和の町」（「サレム」はヘブライ語で「平和」を意味する）として、祝福した可能性もある。

-

14章の解説（あらまし）

14章は、何が起きているのかというと

東方の四人の王（ケダラオメル、アムラベル、アリオク、テダル）が、ソドム、ゴモラなど五つの都市の王に対して軍事行動を起こす。

文脈から、ソドム、ゴモラなど五つの都市は、12年間ケダラオメルに仕えたが、13年目に反乱を起こした（14:4）ため、

14年目にケダラオメルらが反乱を鎮圧するため侵攻した（14:5-7）。

ケダラオメルらは各地の部族を撃ち破り、シデムの谷（塩の海）で五人の王と対戦（14:8-9）した。

そこで、ソドムとゴモラの王は敗北し、アスファルトの穴に落ちて壊滅、財産と食料が奪われた（14:10-11）。

この出来事のときに、アブラムの甥ロトがソドムに住んでいたため（14:12）、

ソドムに住むロトが東方の四人の王に捕らえられたというのだ。

ロトが東方の四人の王に捕らえられたことを知ったアブラムは、訓練された家臣 318 人を率いて夜襲をかけ、ダマスコ近くまで追撃してロトと財産を奪還した（14:12-16）という話だ。

戦後、ソドムの王がアブラムを出迎える中、
サレムの王メルキゼデクがパンとぶどう酒を携え、「いと高き神」の名でアブラムを祝福した。
これに対し、アブラムは（神への感謝の気持ちからか）戦利品の十分の一をメルキゼデクに捧げた（14:18-20）という。

一方、ソドムの王は「戦利品の財産はあげるので、奪還した人員はこちらに返してほしい」と提案したが、アブラムは「糸一本でもソドムからは物を受けない」と拒否した（14:21-23）が、
既に食べた食べ物だけはもらっておくと言った（14:24）。

※AI に点数評価をさせた結果

<a
href="<https://mybiographyofchrist.up.seesaa.net/image/E589B5E4B896E8A898EFBC91EFBC94E7ABA0E381AEE8A681E7B484.mp4>" class="video-link"> 創世記 14 章の要約.mp4

AI は 100 点にするためにはと色々な案を書いているが、
他をいじると他の点数がより下がってしまうから、
俺は、この要約・注釈がベストだと判断し、生成した。

このように、毎回、AI から最高点を評価されることを目指して書いている。毎回だ。
俺がいい加減な内容を書いているのではなく、私見は 0 にして、私見にとらわれず、事実と論理に基づいて誠実に書いて、AI に見せて点数の評価を受けてから、ここに出力している。

普段は録画をしていないが、「毎回」、「100 点」又は「100 点に近い文面」を出力している。

このようにして正確に考えていった結果が、俺の見解（私見）になるのだ。
総合的に見て考慮して評価をして、論理的に「聖書が悪」という結果が出たので、結論として聖書を否定しているのだ。俺が愛しているのは、結論先にありきではなく、正義であって、その正義は事実に依拠して論理的に考えて結論（正しい結論）を導くことである。

--

創世記 - 章 14

タイトル「アブラムの勝利と信仰」

※AI に点数評価をさせた結果

<a

href="<https://mybiographyofchrist.up.seesaa.net/image/E589B5E4B896E8A898EFBC91EFBC94E7ABA0E381AEE382BFE382A4E38388E383ABE381AEE8A995E4BEA1EFBC88E782B9E695B0EFBC89.mp4>" class="video-link">創世記 14 章のタイトルの評価（点数）.mp4

聖書が伝えようとしている内容（聖書が教えようとしている内容）は、
章 14 の骨子は、前半が「勝利」、後半が「信仰」、
よって、「勝利と信仰」の 2 点になると読めたし、
「アブラム」のそれを紹介して、
手本にするように教えようとしているように見えるから、
俺は「アブラムの勝利と信仰」が章 14 にふさわしいタイトルだとして生成した。

このように、毎回、AI から最高点を評価されることを目指して書いている。

--

原文
省略

--

※オウム真理教（現アレフ）の危険性

このように、ユダヤ教が危険な宗教だということはあかした。
この宗教は、邪神アラー（邪神 YHVH）が、モーセに説かせた宗教だった。

同じ神が、日本で説かせた最も危険な宗教にオウム真理教（現アレフ）がある。

宗教というものは、人間の心の苦しみを平安へと導くものである。
よって、多くの人間にとっては、その道は、「平和」が最終目標であると計算できるから、
戦争を起こす宗教を想起する教祖は少ないように思われる。

しかし、教祖が高卒レベルの愚者である場合、大変危険な宗教が生まれることがある。

オウム真理教の教義は、

麻原彰晃を唯一・絶対の神と定義する宗教であり、
麻原彰晃の命令・予言が絶対であるとする宗教である。
この予言というものは、「終末・ハルマゲドンの戦い」である。

麻原彰晃の軍団は天から来た軍団として、
麻原彰晃はキリストだとして、
地上の悪魔と戦うというのだ。
この戦いを経なければ平穏な世界はなく、悪魔（社会）が襲いかかってくるという被害妄想であった。

これを実現する手口として、
麻原彰晃は、オウム神仙の会からそうだったが、社会で苦しんでいる人間共を集め、その人間の価値を認めていった。
自分の心をはかってくれと思った人間達は、
麻原彰晃にとりついていて邪神（破壊活動をもくろむ悪魔）に奇跡を見せられたこともあって、
麻原を菩薩の化身だと信じるようになった。

これは、俺が X で Grok3 に注意した内容であるが、
奇跡を起こせるのは神だけではなく悪魔も起こせるから（「ランの奇跡」参照）、
奇跡を見せられたからといって正しい神とは限らないのだ。

オウム真理教は、もともとはオウム神仙の会というヨガサークルだった。
ヨガというのは、荒行で飲まず食わず寝ずでずっとやっていると脳が正常である限界を超えて異常になるので幻覚が見えることがあるのだが、それを麻原の影響だと信じたこともあった。

社会に苦しめられている人間共は、救世主と信じる麻原彰晃のもとに集って、
麻原彰晃を迫害している国家・社会というものを敵視して、
麻原彰晃が勝利すれば全ての御魂が救われて平和な世になると信じていた。

しかし、麻原彰晃の思惑は、
信者も含めて、全人類をあやめることだった。この人間界から全ての人間をあやめようとしていた。

そのため、炭そ菌だのボツリヌス菌だの何だのと安価で大量殺傷能力がある生物化学兵器

の開発を進め、
皇居だの国会議事堂だのに向けて散布させていたのだが、失敗に終わって、
やっと成功したのがサリンだったのだ。
このサリンを世界70億人をあやめるために、70トンかな。作ろうとしていた。

ロシアの大学で兵器製造の勉強もしてきて、オウム教団内で重火器を製造していた。
押収された重火器が2万挺以上あった。
弾薬が400万発はほしいし、重火器は800万挺くらいほしいと言っていた。

核兵器まで作ろうとしていて、ウラン濃縮をするために、ウランを採掘する土地を海外（オーストラリア）で購入していた。

兵力も必要だとして、西成とか、そういう所で浮浪者をやっていた人間を集めてきて、
自衛隊から入信した信者に戦闘訓練をさせて、
ロシアにも送って、ロシアで射撃訓練をさせていたのだ。

自衛隊も乗っ取ろうとしたみたいで、
陸軍の指揮官（習志野第一空挺団長）の娘を調べて、娘を誘拐して指揮官を脅そうとして
娘が使う家の電話に盗聴器を設置していたら、
ミスをして電話が使えなくなっていたから、専門家が調べたときに盗聴器がしかけられていることが発覚して
誘拐に失敗していた。

麻原彰晃の唱える救いというのは、
浄土に行かせることだったが、
表面では愛だの慈悲だのを唱えながら、裏では反対勢力の弁護士一家を殺害（1988年11月）して、
それで何くわぬ顔で選挙活動をしていて、国会議員に25名くらいが立候補していた（1990年）。

坂本弁護士一家を殺害する前に、
1988年9月に修行中の信者がてんかんを起こしているのに、
医学的知識がないから、「興奮しているから、水で冷やさせろ」と側近に命令したら、
側近が、頭を浸水させて、息を吸うときに肺に水が入ってきたから、呼吸ができなくなって、
酸欠で死んでしまったのだ。

麻原も最初はあやめる気がなかったので、驚いて「何でこんなことになったんだ？」と弟子をしかっていたが、

麻原の高卒レベルの頭脳で計算した所、これが見つかったら教団は終わりだと感じて、麻原の幼稚な頭脳では隠蔽できると思ったから、「ドラム缶で焼いてしまえ」と命令をして、ドラム缶で焼かれた死亡者は骨も残らないくらい粉碎されていた。

このシーンを目撃していた当時の21歳の信者が脱会したいと言ったら、口封じのために、その信者を暗殺したのだ。

側近に指示を出して、目隠しをさせて、首をロープでしめて、あやめたのだ（1989年2月）。

その次は、教団内病院で治療を受けていた女性への治療がおかしいと感じた教団内病院につとめている薬剤師が、

脱会をしてから、その女性を助け出しに潜入に来たら、見つかって、とらえられて、その女の息子と監禁されて、その女の息子のほうに、「こいつをあやめたら、お前の命をたすけてやる」と言って、

母親を助けにきた薬剤師をあやめさせたのだ。

この方法で、殺人罪にまきこみたかったわけで、口封じのために、ほかの信者にそれをさせていたわけだ。

麻原は、実行犯ではないし盲目を理由にして、言い逃れができると考えていたのだ。

遺体はマイクロ波焼却装置を使って焼却してから、トイレかな、排水口から流したのだ。トイレだったと思うがな（1994年）。

1993年（平成5年）6月9日に行われた「皇太子成婚パレード」（現在の令和天皇・徳仁親王と雅子妃の結婚式）で

今の天皇夫妻をあやめようとして、皇居とかパレードルートにまいたし、そのスイッチは麻原自身が押したのだが、未遂に終わって誰もあやめられなかった。

それからサリンに変更して、サリンが成功した。

1994年6月に松本サリン事件。

1995年3月地下鉄サリン事件。

他にも VX ガス（神経毒）も1994年12月～1995年に使用して、結構多くの人たちに使っていた。

被害者の会会長 VX 襲撃事件では、いまだに神経に後遺症が残っている。

俺も、こういうものをやられたことがあるが、力が入りにくくなるのだ。

1995 年 5 月 16 日に麻原彰晃が逮捕されて
翌年までに信者が 4 0 0 人くらい逮捕されたのだ。

麻原彰晃の厄介な所は、天上界の妖怪図鑑に載っている妖怪であるにも関わらず、多神教の神の称号も YHVH から与えられていたから、
YHVH から大天使ミカエルの部下としてハルマゲドンの前哨戦の天上界の戦いで配属されていたのだ。

『大天使ミカエルインカーネーション』では tx15 とか tx16 で「刑務所戦線」になっているのだが、
これが日本だと東條英機らが入った巣鴨刑務所みたいな所で、同じ所ではなく別の世界なのだが、
そういう所にオウム真理党の選挙活動の奴らが次元転送で送られてきて、大天使ミカエルに挨拶をしにこようとしていた。

さすがに麻原は物語では出せないから、その話はしていないが、天上界でも問題ばかり起こしている奴で、
邪神 YHVH から命令をされて、多くの善なる天使をかげで暗殺・虐殺してきた神でも天使でもないような賊だったのだ。
天使の人数がどんどん減っていくから、もちろん、上官だった大天使ミカエルは、それに気づいて、麻原彰晃の活動を霊視していたら、味方であるはずの天使たちを油断させてレイプ・虐殺をしていたため、キレて麻原彰晃（妖怪）を葬りに来て、大天使ミカエルと麻原彰晃（妖怪）が戦って、麻原が処刑されたのだ。

その影響があって、地上では、麻原一味が死刑執行されたが、それでも邪神 YHVH は天上界にひきあげて、罪を償わせようとして邪神と麻原を戦わせて、大天使ミカエルのために玉碎させた。

そういう話はいいにしても、一応天上界の称号がある者だったために、
麻原は天上界からハルマゲドンのために戦いに来たという吹聴をしていたのだ。

麻原の信者が 1 万 5 0 0 0 人ほどになったのだが、
麻原がしたかったことは、出家を口実にして、
金と人員を回収して、
麻原国家の人民にしていたのだ。

その延長で日本国を乗っ取ろうとして、選挙というソフトな方法で目指したが、失敗したために、社会の陰謀によって選挙の投票数の不正操作が行われたと主張して、国家そのものをクーデターによって乗っ取ろうとした。

麻原国家の目標は、信者も含めて全人類を葬ることだったから、一番近隣にあった日本国と干渉して、すぐ戦いになったのだ。

この麻原は処刑されたにもかかわらず、麻原の予言を信じている信者がまだいて、その予言とは

「ハルマゲドンの戦い（終末戦争）」が起きるから、自分たちは選ばれた戦士だから、その戦いの準備をしておかないといけないという

教義で、

オウムからアレフに名前を変えたのは、上祐が被害者に謝罪・賠償がしたいと言って違う名前になったのだが、

麻原の家族は、麻原を信じているから、反対派を追い出して、アレフは、今は、オウム真理教になっている。

オウムだと活動できないから、アレフに名前を変えて、資産も隠して賠償せずに武装している。

上祐のほうは、光の輪という組織を作って、オウムとは教義を離れて、謝罪をしていこうとしている。

公安としては、いずれも危険だから、監視は怠ってはいけないというスタンスだ。当然だ。

このアレフは、オウムと同じことをやっている。同じ手口で勧誘している。

オウムの頃は、信者を信用させて資産も回収して生き方もうえつけてオウムなしでは生きていけないほどに依存させてから、武装して国家と戦うのだという布告をするようにしていた。アレフのやり方は、表面では親切に見せて、SNSとかで、アレフだとあかさずに、若者たちの悩み事相談に応じる形で、ヨガセミナーに呼び出して1か月たったら、アレフだとあかして、「今はもう組織が変わって昔みたいな危ないことはやっていないので大丈夫です」と言いながら、教団の中では、麻原の写真が真ん中にかざってあって、麻原のパワーが出てくる

という飲み水のタンクが置いてある。

家族が麻原のあとを継ごうとしていて、麻原の予言を成就するために、今は信者の数を増やそうとしている。

年間80～100人入信しているようだ。

オウムが言うハルマゲドンの終末戦争をしたいから、資金隠蔽もして被害者賠償を嫌がっているし、人員も集めている最中だ。

若い人員だと世の中のことを知らないから、そういう世の中の善悪の常識をうえつけられる前に、オウムの洗脳ノウハウで洗脳して、軍事力にしようと画策している。

ただ、もう超能力を使える麻原が処刑されたし、教団の武器も押収されたし、資産もほとんどが無くなっているし、30年経っても語り継ぐ奴らが多いから、戦争に向けた活動はほとんど進んでいない。教団がなくなるかどうかくらいの細々とした活動ではあるものの、もし、この教団が力を蓄えてしまったら、もう一度軍事行動・内乱活動を起こしてしまう。なぜなら、麻原の予言を信じている狂信者共がアレフに集まってかつての方向に向いた活動をしているためだ。

俺もアレフから話を聞くために（アレフを中から壊すために）メールを送ったが、アレフからは回答がなかった、アレフは麻原以外を神だと認めていないから、俺がキリストの再臨者だとあかしをしても、麻原以外は信じないから、麻原以外の神には回答をしてこない。

この閉鎖的団体の手口は、

社会の苦しみから解く方法は「ポア」だという麻原の教えを守る団体だから、終末戦争を起こそうとしている。

力を蓄えたら全人類を実現可能な安価な生物化学兵器の散布であやめようとしているから学者になりそうな東大や京大の学生はよくターゲットになっている。

ここから学ぶべきことは、宗教全体にいえる注意だが、

宗教というものは、心の弱い人間を狙っているから、その心の弱さは悪魔にとりつかれて間違えた道に走りやすいということだ。

安全な宗教は、ここで神（俺）が記載している4つの宗教だ。この4つ以外からは出ない方がいい。

危険な宗教を信じるくらいなら、科学を信じたほうがいい。

科学とは、道理を信仰することだからだ。この道理を見極めれば、真理が分かり、正しい生き方が分かるからだ。

しかし、科学の分野は広範だから、たとえば化学の一分野を勉強しているだけでは、化学反

応式を勉強していても、そこから人生で何をすることが正解かは、全体を極めないと見いだせない。それだけでは、オウムの信者のように間違えた道に進んでしまう。オウムの信者共は、結構学歴があって、東大を卒業してノーベル賞を目指していた奴とか大学院の研究室で勉強している奴らが多かった。

こういう奴らは、突出して頭がいいから、世間とはなじめずに真理を求めていたら、悪霊が超能力を使わせていた奴がいたから、その悪霊にひっかかった訳だ。

しかし、酒鬼薔薇聖斗みたいな14歳とは違って大人なのだから、殺人等の犯罪を犯した場合、自分で責任をとらないといけない。

この心の弱さというものが、麻原への依存に利用されて、麻原主権の国家を樹立するための戦闘員に使われたわけだ。

もう一度はっきりと書いておくが

麻原の宗教は、麻原を絶対の神として、麻原の予言を絶対のルールとしている。

この予言に逆らうものは悪魔として排除される。教団内部は、上記のように粛清が横行していたため、

命令に従って犯罪に加担させられる風潮ができあがっていた。

脱退を申し込めば、口封じのために処刑される。

これは、暴力団と同じなのだ。

オウムは暴力団の組織運営をとりいれるために、暴力団の名のある者（山口組系）を顧問にしようとしていたし、

実際に話を聞いて、暴力団のやり方を教わっていた。

元組長も信者にいた。

奴らの最終目標は、「全人類を葬ること（ハルマゲドンの終末戦争での勝利）」なのだ。

人類は、麻原や弟子を迫害してきて悪魔の軍であり、

奴らは、天からこの執行をしにきた天使の軍だと思っているようだ。

だから、弱いうちは、潜伏しながら力を蓄える活動をしているが、人員や資金がそこそこなってくると

サリン事件のような対外的挑戦活動をしてくる。

その手口は、宗教で、心の救いを探している弱者を救おうとして導くことなのだが、表面では親切なそぶりをしていても、

奴らの目的は、信者も含めてあやめることだから、

結局、使われた後にポアされてしまう。

ポア（あやめること）することが、奴らにとっての救済活動なのだ。

人類にはカルマがあるから、聖なる者に葬ってもらうことが、人類にとっての功德になるのだと

麻原が言ったために、その言葉を信じて、その通りにしようとしている活動者達なのだ。

麻原を信じているなら、アレフは、どこまでいってもオウムでしかない。

この狂気で稚拙な内乱分子を作っているのは宗教なのだ。

奴らは、麻原は、勉強をしていないから、

新約聖書のヨハネ黙示録の「ハルマゲドン」を奴らの戦いにおきかえた訳だ。

この戦いは、エホバの証人解釈の通り、神・天使と悪魔との最終戦争のことで、

『大天使ミカエルインカーネーション』で教えた通り、天上界で既に終わっているのだが、そういう事情を知らずに、まだまだ麻原の予言は成就していないから、これから戦争が訪れるとアレフは考えている。

地上でこれがあるという教義にしてしまうと

神に属していると妄信している人間共による最終戦争が宗教によって起きてしまうから、

正しい神は、この終末戦争は、天上界で既に終わらせているのだ。

こういった狂気じみた宗教に入信してしまう理由は、

心が安定していないためだ。

人間にとっての幸せというものは、神から書かせれば、「平和」が答えなのだ。

この平和のために、個人としての活動は、

まず、第一に「心が安定」すること（心の安定）。

次に、健康で長寿であること（肉体の平和）。

この2つを考えると人権をしっかり保障して、それを平和に結びつける

日本国憲法や欧米の憲法のような仕組みが、大変よい内容になっている。

よって、まず最初に「民主主義」を認めることが、定石になっていると俺は教えたのだ。

民主主義がないと人命が軽視されてしまっって大戦争になってしまう。

オウムというのは、学歴がない稚拙な奴がオウム返しのように邪神の言うセリフをそのまま言っていたので、

内部で粛清の嵐が起きていた。

人命を尊重する民主主義の仕組みで組織が運営されていれば、あのような凄惨な事件は起きなかったのだ。

よって、組織運営は、まず民主主義を前提にすることが、定石になっている。

それから、法も学ばなければならない。法の中には歴史の勉強もあるが、法がある場合とない場合に、どのような結果の違いが起きて、歴史はどう証明してきたかを勉強することだ。刑法では、違法な行為が罪として定められていて、罰則の規定があるから、計算ができる人間であれば、「こんなことになるから、犯罪なんてしない」という行動になる訳だ。

しかし、盲学校出身者で大学も卒業していないような計算力がない指導者が君臨してオウムみたいに出家をさせて孤立している反社会集団というものは、独自の社会の法を前提にしているから、このような愚か者が自らの欲の発散のために帝政をしいた場合、旧日本帝国のような暴走をしていたのだ。

心が安定していないから、宗教に走る人間が出てくる訳だし、社会から疎外されていると感じている人間は、その社会を作っている政府を敵だと憎む傾向があるから、オウムのような教団に戦闘員として利用されやすい。

もう一度書くが、人間にとっての幸福を目指すことが、正しい神が与えようとした宗教なのだ。

正しい神とは、人間にとっても正しい神であり、救いの神なのだ。

その目指す所は、万物の調和・平和であり、全ての者が幸福である世界なのだ。

もし、神が、創造物を痛めつけて、のちの禍根を作っていくなら、いずれ神自らにその反動は返ってくる可能性があるから、

正しい神が目指す所は、万物の平和・調和の仕組みの中に万物を置くことである。

よって、人類は、幸福になるために平和を目指さなければならないが、そのためには、まず、心が動揺しているようでは、外部に悪しき行為が出てしまうから、心から出る行動が正しいものとなるために、心から欲を消しさなければならない。

心が正しくなければ、行動も正しくなくなってしまう。

だから、俺は、何が正しいのかを見極めるために計算というものをオセロを通じて教えたのだ。

総合的に計算をして問題が解決する手を善だと評価するからだ。

その計算は間違えやすいから、あらかじめ俺が計算した答え（定石）を論証つきで教えてきた訳だ。

次に、健康になり、長生きできなければならない。

心だけ平和でも体が苦しんでいたり、その平和を届ける時間が短ければ、世界の平和は続かないかもしれないから、

できる限り長生きをできるように、健康を目指さなければならないから、俺は、医学も教えたのだ。

このように宗教に潜む悪は多いから、

俺は、4つの正しい宗教を判定して、ここに記載しておく。

宗教は信じてても信じなくてもいい。

神自身が乱れていたのだから、地上に来た宗教には間違いが多い。

キリストは俺が過去にやった人物だったが、この世界にキリストが来ていたかなと思って過去を調べてみると

この世界はパラレルワールドの世界の方で、どうやら俺は、この世界ではない本命の世界の方でキリストをやっていたようだ。

だから、この世界には、イエス・キリストが実在したことを証明する科学的証拠はないはずだ。

考古学的資料には、イエス・キリストがいたと証明する遺跡はないはずだ。

口述・口伝・調書は、捏造できるから、その出来事・存在を証明する遺跡がないと証明できない。

ジャンヌ・ダルクが存在した事実であれば、刑事裁判資料に残っているから、証明できるが、イエス・キリストについては、それは無い。

なぜかと思って過去を調べてみると

この世界にはイエス・キリストは来ていなかった。だから、「宗教なんて信じるな」というテーマで過去に教えを書いた。

<https://ameblo.jp/distribute-7/entry-12853741249.html>

この URL だ。この文献と同じテーマで書いている。

イエス・キリストがこの世界で存在したことを証明できないことは、本人が受けるべき結果であるから、もともと神の意志である。

弟子が書いた福音書を読んだが、俺が言ったセリフにしては、論証がなく宗教家のようにレベルが低すぎるから、よく調べてみたら

この世界には俺は来ていなかった。

この世界は、俺がキリストをしていた世界のパラレルワールドでつくった世界であって、この世界に俺が飛ばされて再臨者の活動をしていたというのは、よりハードルが高い試練だったのだ。

よって、科学的な証拠にしたがって、「イエス・キリストなんていなかった。聖書は全部うそっぱち。」という結論でいいわけだ。

俺も、この結論を採用する。科学に基づくことが、道理に基づくことであるから、これが正しい結論なのだ。

よって、宗教を信じなくても、正しい行為を計算によって割り出して、人類の平和に向かって、

そのためには、一人一人が平和でなければ、総体としての平和が崩れていくから、

個人としてのなすべきことは、個人の人生が平和で落ちつくように、心をおちつかせて、人

生設計をおちつかせて、その設計にしたがって日々健康に生きていくということなのだが、俺が先に計算した定石を与えたものが、赤字で書いた「福音憲法12か条」であって、

<https://ameblo.jp/distribute-7/entry-12853742659.html>

それを日々の生活のスケジュール化したものが「チャート」とか「ルーチン表」とか「作業標準書」なのだ。

ルーチン表

<https://ameblo.jp/distribute-7/entry-12838669364.html>

この教えを人類の平和のために置いておかないといけないし、侵略から領土を防衛するときは、自衛のために防衛すべきだと言ったが、違法な侵略をしている側が、この権利を悪用してはいけない。あくまで領土の自衛は、正当な防衛でなければいけない。手法も正当でなければいけないから、騙しうちとかは禁忌である。正義ではないためだ。

大天使ミカエルは、正義の戦士であるから、成功のために大天使ミカエルの助力を得るためには、正義を希求すべきであるし、世界を守るためには、力（正当な軍事力）も必要である。この備えだけでも余計な交戦は防げるし、核兵器のような民間人をまきこんでしまう殺傷範囲のひろいものは必要ではないし正当とはいえないから持たない方がいい。刀伊の入寇やモンゴル帝国の来襲とかオウム真理教や暴力団による突然の襲撃があった場合は、軍事力を行使して、防衛しないとといけないし、裁判にかけないといけないが、計算力を働かせて、被害を最も少なくする最善の結果を目指さないといけない。

俺が伝えたい教えは、日本憲法にしっかりと書いてあるが多いから、日本に再臨（降臨）したし、日本国憲法（平和の精神）を守っていけということが、俺の教えでいい。

本当かどうか分からない（実際は嘘話ばかりの）宗教なんかは抜きにして、「真理」（道理）を教えたい。道理に従えということを教えたい。それが本来教えに来ていたことだったのだ。その道理とは、オセロの先の読み方を教えて、その読み方を人生規模、地球規模・国家規模に発展させて歴史、特に日本の歴史から教えたが、日本国憲法は平和に対する罪が日本に多かったから、その原因は帝政が悪の勢力に利用されたことによって起きた人権軽視だったから、平和と人権を守るためにしっかりと規定されたし、しっかりと民主主義が機能するように構成された。

ここで日本国憲法9条が自衛力すら否定しているから問題になる。自衛の定めが欠缺していることも国民の人命を国家が守らないために少し違法になる。

俺が日本国憲法9条の定めを置いた理由は、自衛力は必要であるが、日本の戦争責任としてしっかり平和の掟を残しておくことが重要だった。

戦えば日本が強いことは歴史を見ればわかることだから、憲法9条のかせがあったとしても、侵略戦争をしかけてくる国は少ないだろうから、そこまで不利ではない。

いざというとき（違法な独裁国や違法な教団などの敵の軍事力によって違法な領土侵略を受けて敵の軍事力によって罪のない国民があやめられているとき）は、憲法9条が違法になるから、そのときは文句なしにロボット自衛隊を派遣して戦うべきである。

通常時は平和を希求する意思で憲法9条はあってもいいが、守らなくていい場合があるから、憲法9条があっても自衛隊を日本に置かせている。日本にとっては、この形の方が実は良い形だと思う。命令で止めていても侵略戦争・交戦しやすい国だったから、一般的には禁止している方が（どうせ戦うのだろうし、無駄な侵略戦争にはどめをかける意味で）、結果的に良いかもしれない。

現在世間で流れている宗教なんて嘘ばかりだから、俺も人間界の宗教なんて大嫌いだし、そんな嘘の宗教なんて信じるくらいなら、宗教なんて無い方がいいし、全消滅でいいから、俺は「科学（道理）を信じろ」と教える。

科学的に追究していくと国家単位の消滅をもたらした戦争があった。

ナチスは消滅した。

日本の場合は東條英機が起こした戦争といえるが、東條なんて学校に入るのに2回も浪人していた奴だったのだ。

その東條は、国土が侵攻されて本土が爆撃されているのに、「そろそろアメリカもねをあげてくるから、この戦争は終わります。本土爆撃くらいでねをあげているようでは、日本国民はいけません。」と天皇の前で言って、天皇は明らかに不快な顔を示していた。

東條は、逮捕されて、巣鴨プリズンに収容されたが、黙ったまま反省の弁も述べず、処刑の前日は手心があって和洋折衷の良い料理が出てきたが、東條は「これでいっぱいやりたいな」となめた発言をしていたし、処刑の直前に「日本酒をくれ」と言ってきて、当時は日本が貧困で物資がなかったから日本酒を探してもなかったから、優しいアメリカ人たちは「ぶどう酒」を提供したら、東條はそれを飲んで満面の笑みでご機嫌になって、「万歳三唱」をやってから絞首刑になったのだ。万歳三唱というのは、それまで自らがやってきた行為に何の反省もなく、それまでのことを正当化する行為であって、平和に対する大変な侮辱であった。この愚か者は、学がないから悪魔にとりつかれて、もう少しでナチスのように天皇まで処刑されて国家がなくなる所だったが、天皇は、本当に神の子孫だったから、「国体護持」の結果になる判断ができたのだ。

この歴史から学んで、国家・国民が滅びないように、道理を守って、よく先を読んで、「日本国憲法の内容を守っていくように」俺は教える。各国には各国の正義の憲法があるから、ヨーロッパ式の最近の憲法（平和主義・民主主義・自由主義・生存権の保障）であれば、そ

れを守っていけばいい。これは、一番強い組織（国家）を縛る法であって、一番強い組織（国家）から市民が守られるように、民主主義の制度にしたものだ。国民の意思が反映されて組織運営（政治）が行われるシステムになっているから、それなら国民が守られることになるし、国民の自由主義がより反映される結果になる。自由といっても、先をよく読んで、欲が反映されると国家は崩壊の道を行くから、指導者はテストをして選抜するか、最も優秀な AI に判断させればいい。

その国家運営の仕組みまで教えておいた。簡単な答えのようで、たくさんある選択肢からは見つけにくいものだ。

・オウム真理教の事件年表（麻原彰晃が有罪判決を受けた 13 の事件を中心に、関連する重要事件も含める）

1988 年 9 月：信者死亡事件（修行中のリンチ致死）。修行中の在家信者が異常行動を起こし、麻原の指示で水をかけるなどの行為中に死亡。遺体はドラム缶で焼却。

1989 年 2 月：信者殺害事件（静岡県）。教団を脱退しようとした信者を麻原の指示で絞殺、遺体焼却。

1989 年 11 月：坂本堤弁護士一家殺害事件。オウムを批判していた坂本弁護士と妻、1 歳の息子を殺害（神奈川県）。

1993 年 6 月：炭疽菌散布未遂（東京）。生物兵器（炭疽菌）を散布する計画が失敗。

1994 年 5 月：VX ガス襲撃未遂（大阪）。教団反対者を VX ガスで攻撃するも失敗。

1994 年 6 月 27 日：松本サリン事件（長野県松本市）。サリンを住宅街に散布、8 人死亡、約 200 人負傷。

1994 年 11 月：青酸ガス散布計画（東京）。坂本事件の捜査妨害を目的に警察署などへの青酸ガス散布を計画するも失敗。

1994 年 12 月：VX ガス殺人事件。教団反対者を VX ガスで殺害（1 人死亡）。

1995 年 3 月 20 日：地下鉄サリン事件（東京）。東京メトロ 5 路線でサリンを散布、13 人死亡、約 6,300 人負傷。

1995 年 4 月：新宿駅青酸ガス事件（未遂）。新宿駅で青酸ガス散布を計画するも失敗。

1995 年 5 月 5 日：渋谷駅青酸ガス事件（未遂）。渋谷駅で青酸ガス散布を計画、装置が発見され未遂に終わる。

1995 年 5 月 16 日：麻原彰晃逮捕。地下鉄サリン事件の首謀者として逮捕。

総括：オウム真理教の事件は、1988 年から 1995 年にかけて、殺人、リンチ、化学兵器・生物兵器使用、テロ未遂など 29 人死亡、6,000 人以上負傷の被害を出した。

・松本智津夫（麻原彰晃）の経歴一覧

松本智津夫（麻原彰晃）の経歴は、左目が生まれつき不自由だったので 6～20 歳の盲学校

ですごし、1年ほど鍼灸院（すぐに診察室になる）と漢方薬局を違法に開設し、薬事法違反で逮捕される。以後、金儲けのために宗教を始め、死刑執行まで犯罪の道をいく。麻原彰晃とは、アシュラ・釈迦の2つの名前から、そうなりたいと思ってとって作った名前だ。正妻の他、教団内に3人以上の妾がいて、妾が麻原の子供を産んでいる。石井久子は3人産んでいる。よって、麻原ジュニアは社会に多く輩出されている。この浮気のために、麻原は正妻から殴られたり包丁をつきつけられていて、正妻は地位が大きいものであり、麻原処刑後もアレフで権力を持っている。

1955年3月2日：熊本県八代郡金剛村（現・八代市）に7人兄弟の4男として誕生。左目が全盲、右目が弱視（幼児期緑内障）。貧しい畳職人の家庭で育つ。

1961年（6歳）～1975年（20歳）：熊本県立盲学校に通う（小学部～高等部専攻科）。

幼少期：いたずらっ子で農機具を盗む・壊す。テレビアニメ（『あんみつ姫』『8マン』など）に夢中。

盲学校時代：視力がわずかにあったため、全盲の生徒を支配する態度が見られた（権力欲の萌芽）。

演劇（『みにくいアヒルの子』主演など）や柔道（1975年に二段取得、後に剥奪）に熱中。音楽好きで「松本智津夫ショー」を開催、西城秀樹の曲を歌う。

成績は中程度。熊本大学医学部を目指すが、視覚障害者への医師免許制限により断念。

1975年（20歳）：盲学校卒業後、上京。東大受験を目指すが失敗。予備校通いやアルバイト生活。

1978年（23歳）：結婚（妻・松本知子）。後に二男四女をもうける。

1978年頃：千葉県船橋市で鍼灸院を開業。漢方や整体を学び、治療行為を行う。

1981年（26歳）：漢方薬局を開業（詳細は下記）。

1982年（27歳）：薬事法違反で逮捕（麻原薬局関連）。

1983年（28歳）：自らを「麻原彰晃」と名乗り、能力開発教室を設立。ヨーガや瞑想を指導。

1984年（29歳）：オウム神仙の会（オウム真理教の前身）を設立。

1987年（32歳）：オウム真理教を正式に設立、教祖となる。

1989年～1995年：オウム真理教の教祖として、坂本弁護士一家殺害、松本サリン事件、地下鉄サリン事件などを首謀。

1995年5月16日（40歳）：地下鉄サリン事件の首謀者として逮捕。

2004年（49歳）：東京地裁で死刑判決（13事件で有罪）。

2011年（56歳）：最高裁で死刑確定。

2018年7月6日（63歳）：東京拘置所で死刑執行。

麻原に巻き込まれて逮捕された信者が多く、

何で、信じたかという上記の理由の他、1990年代というのは「ノストラダムスの大予言」が流行っていて、1999年あたりに終末戦争が起きて世界が減ぶといった集合無意識が流行っていて、麻原は精神病患者だったから、色んなとんちきな予言を繰り出してくるが、収監中に、それらが次々と外れていったので、信者達は、麻原が嘘をついて皆をだましていたことに気づいて、6割くらいは麻原に怒り、決別を決心した。それからは真摯に犯した罪と向き合って、被害者に対して謝罪の念をもって、被害者の名前を書いて、毎日拝んで供養している受刑者もいた。あとの2割くらいは、半々くらいで、まだ麻原から完全には離れていない人間がいて、あとの2割がコアなオウム信者なので、麻原の家族と結託して次のオウムの活動(戦争準備)をアレフでやっている。

この教団については、暴力団と同じなので、暴対法と同じように、経済的にしめあげて、抜けさせて、活動をさせていかなないようにしないといけない。内心は、誰でも自由なのだが、外に出ると多くの人間に迷惑がかかる教義だから、過去の事件の実績が十分ある危険な教義だから、集まったらいけない。なぜ、オウムが、オウムだけではないが、入会をさせるのかというと信者に対しての影響力を強くしたいからなのだ。釈迦の場合だと外界の苦しみ(間違い)から守りたい気持ちで入団(入所)させていたが、オウムの場合は、外界と隔離して、洗脳して、人員を奴隷・戦力にしたいために、それ(入会勧誘)をやっているのだから、戦争準備をさせてはいけない。よって、オウム対策新法みたいなものを作って、経済的に封鎖しないといけない。近頃は、オウムやアレフであることを隠して出会い系サイトで女性を誘って連れてきたり、SNSで就活前の大学生を連れてくることが多い。

以前は15000人くらいいたが、ああいう事件になって一斉に逮捕されてからは、現在は、3つの団体にわかれている。3つの団体のトータルで現在1500名くらいだ。3つに分散しているというのは、麻原のときのような1つの主義に力が集中しているわけではないから、うまく叩けた証拠だ。被害者支援活動によって、皆が語り継いでいる事件だから、が、上祐に関しては、かなり被害者サイドによっていて、もうオウムではない。彼の考えとしては、やはり人間として人生を潰された恨みがある。それは社会に対しての恨みではなく、麻原個人に対しての恨みである。彼は真摯に道を目指していたのに、人間とし

て恥ずべき行為をさせられて、これだけ大々的に報道されたら、やり直しはきかない。
その上祐にせめてできることは、やり直しだった。彼が考えた結論は、そのやり直しとは、
人間としてやり直したいことであって、それは、被害者のために生きて、アレフに惨劇を繰
り返させないことだった。
アレフを潰すために、教団内部の暴露をして生きていくつもりのようなのだ。いつもアレフ潰し
のために何かをしようとしている。これは、とてもよい活動であるから、今後も続けていく
べきである。

オウムは、山口組に対して、なめた態度をとっていたから、
構成員から村井が刺殺された。
組員がオウム内にいたら脱会しろという示唆で行っていた。

酒鬼薔薇聖斗にしても、そういう事件が起きる社会構造があるのかと考えさせられる。
1997 年 5 月、酒鬼薔薇聖斗は、小学校 6 年生の男児（土師淳）を殺害し、のこぎりで頭部
を切断して、その血を飲み、5 月 27 日、その首を自身が通う神戸市の中学校の正門の右側
の塀の上に置こうとしたら届かなかったから
正門前の地面に置いて帰った。
その男児の口には手紙がくわえさせてあって、その紙には「酒鬼薔薇」の名で
「さあゲームの始まりです
愚鈍な警察諸君
ボクを止めてみたまえ
ボクは殺しが愉快でたまらない
人の死が見たくて見たくてしょうがない
汚い野菜共には死の制裁を
積年の大怨に流血の裁きを
SHOOLL KILL
学校殺死の酒鬼薔薇」
と書いてあった。

俺は、当時、この事件を見ていたが、「さあ、ゲームのはじまりです」と書いてあったら、
すぐに逮捕しないともっともっと殺される小学生が出てくるとのことだよな。
こいつが、友が丘中学校という中学校で普通にすごしていて、教員はびっくりして朝礼で、
「この話は外には言わないで！」と皆に言っていた。
その後、クラスで「お前がやったんやろ！（笑）」「お前がやったんやろ！（笑）」という話を
酒鬼薔薇聖斗がふられて、「いや、俺ちゃうし（笑）俺やったら絶対地獄におちてるし（笑）」
と笑いながら言っていたのだ。

当時、『スレイヤーズ』という小説がアニメになって流行っていた時期で、酒鬼薔薇聖斗は『スレイヤーズ』の小説が大好きで、よく読んでいた奴だったが、その小説に、そういうシーンが多く出てくる小説だったのだ。驚くような加害行為を笑顔で平然とやる小説なのだ。例えば、ゼロスというキャラは、高位魔族なのだが、プリースト（僧侶）のかっこうをしていて、おちついた笑顔で平気で残虐行為をして、その驚きによって人気を稼ごうという作者の狙いがあったのだ。そうしたら、『スレイヤーズ』を読んでいる読者の全員がそういうことをする訳ではないのだが、家庭がうまくいってなくて精神破綻していたとかさまざまな要因が重なって、ファンタジーの小説ばかり読んでいた子は、まだ14歳だったから、現実とファンタジーの区別がつかなくなって、『スレイヤーズ』のノリでおもしろおかしく残忍な行為を繰り返していたのだ。手紙の文面も『スレイヤーズ』の呪文のような文言（「死の制裁」とか「積年の大怨に流血の裁きを」）で書いてあるだろ。本当に『スレイヤーズ』ファンの子供がやった犯行だったのだ。何で、小学生に裁きの必要があるか、制裁の必要があるかという意味分からないだろ。これは、スレイヤーズのドラグスレイブとかギガスレイブという一番強い呪文が、そういう呪文になっているから、スレイヤーズ好きの子が、同じように書いてしまったのだ。

人を殺す前は、猫を殺して山に捨ててたのを見かけた。
当時は、そういうことをやっている人間が多かったから、気にとめないことだった。

よく手紙の文字を書く子だったから、筆跡鑑定でバレて、容疑者にされて、
警察官から「筆跡が一致したんや」と犯行声明文を突きつけられたら
突然声をあげて泣き出して自供したから逮捕された。
調子に乗ったことを書いてさんざん社会に喧嘩を売っていたのに、弱いなと思った。

その後、家庭裁判所が医療少年院がふさわしいと判断し、
関東医療少年院に行って、その次に東北少年院に行ったが、いじめられていた。
それから退院が認められて、保護観察も終了して、
それから10年くらいして、金がなかったから出版社の依頼に応じて『絶歌』という本を出版して、示談金の支払いに回していた。

このように、人間というのは、目や耳から入ってきた情報から学ぶので、
暴力的な漫画を読んでいるとか、宗教にはまっているとかが原因になって、奇行をするようになる。

座禅をする理由というのは、
座禅をずっとやっていると悪魔から目をつけられるので、悪魔が現れる者がいる。

それによって、変な力を発揮する麻原彰晃みたいな奴がいた。それを超能力だと麻原彰晃は言っていたが、そのために座禅の修行をするのではなく、

その悪魔をふりはらうために座禅をするのだ。

その悪魔というのは、もとから心の中に潜伏している悪魔が、欲に訴えかけて登場してくる。姿を現して驚かせて「力をやるから世界を支配しろ」みたいなことをイエス・キリストに現れた悪魔のときみたいに言って誘ってくる。

俺は、俺の体験だけでなく、色んな行者の体験談を知っているから、その共通点は、座禅の修行を続けていると出てくることだったのだ。

高僧になると慣れたもので、「それは幻じゃ！ 惑わされてはならん！ カーッ！！！」と弟子に言って悪魔をふりはらう訳だ。

初めてそういう体験をした弟子は、現れた悪魔を神だと信じてついていきそうになる。そういう力が欲しい修行者は悪魔についていってしまうのだ。

仏教の修行をやっているときに、この悪魔が本当によく出てくるのだ。通常、人間には見えないのだろうが、たまに人間にも実体をはっきりと見せて出てくる悪魔がいる。それは、かなり強力な悪魔である証拠だから、とりつかれたら、連続テロ事件とか、内乱罪をさせられるようになって、最後は、刑死→地獄のルートにおとされる。

オウムがまさに、そういう病気の感染源だったのだ。

あたる予言は、どうでもいいことが最初に2～3あるくらいで、例えば、「～～さんは、・・・と思ってますよね」とか、予言とも言えずに、そのときの気持ちを言い当てるくらいで、それが当たったら、相手は、神だと信じてしまうのだ。相手にも悪魔が憑依して、そう思わせるようにしむけているからだ。

麻原彰晃の予言は、後期になると突拍子もない大きな予言をどんどんしていくが、どんどん外れていく。ハルマゲドン（終末戦争）は1997年にあるとか言っていたが、その頃、まさにオウム信者らが収監中だったが、信者らがいつまで待ってもそれは来なかったし、他の予言もどんどん外れていったから、6割くらいの信者は麻原彰晃が嘘をついていたことに気づいて、自分たちが騙されていたことに気づいてオウムから離れていったのだ。

しかし、それが悪魔のしわざだったとはわかっていないから、麻原彰晃個人の動機で行われたと思っている。

俺は別の世界から全部見ていたが、麻原彰晃も悪魔にとりつかれて、操られて、動いていただけの人形だった。あの一連の事件は、全部、悪魔がやったことだったのだ。

最初から、目が見えない、左目は緑内障でほぼ全盲だった。

片目は光が見えて、もう片方の目は闇に包まれているのは、こいつの光と闇をあらわしているようだった。

俺がインカーネーションのときに天上界に行ったばかりのときに

こいつは悪魔に魂をのっとられている状態で天上界に来てチャラチャラと俺の前に立って

喧嘩をうってきたから、
俺は空手を使って一撃で倒した。

それから麻原は俺に恨みを抱くようになり、
俺の部下の天使を殺害していく計画をたてるようになった。
そのため、俺は麻原を処刑した。

するとヤーウェが麻原を生き返らせて、俺と敵対していた邪神と麻原を戦わせた。
今は天上界にもこいつの魂は無い。
その邪神に殺されて永遠の呪い（永遠に復活できない）を受けて消滅してからは、こいつの魂を見たことが無い。

麻原は死ぬ前に俺に「神、キリスト、愛してます！大天使ミカエル様、もし、地上に行かれることがあったら、私が残してきた娘がいるんです。その娘たちが悪霊にとりつかれないように、助けてやってもらえませんか？」と言っていた。

麻原にそんなことするわけないだろうと俺は思っていたが、ついでにアレフに「麻原から頼まれたから、俺がお前らに本当の真理を教えてやる。俺は創造主・神ヤーウェだ。」と書いてメールを出してやったが、返信は来なかったから、俺にできることは何もない。奴らは麻原を唯一の神だと信じていて、麻原と同じ悪霊にとりつかれているのは本人の運命だ。俺が救う運命になってない。俺にできる救いは、もちろんポアではなく、アレフが犯罪に走る前に、世間にそれを知らせて、世間に経済封鎖（新法創設）を提案して、アレフから脱退者を増やす流れにすることだ。

麻原は、俺のために戦って死んだことになっているから、多神教の神の一人に列せられているものの

妖怪大図鑑にも「要注意の妖怪」と書かれて載っていて、
俺は、麻原のことは、悪魔だと思っている。

二度と会いたくないし、顔も見たくない。だから、麻原の魂は二度と復活しないが、こいつは神に従順に従うという気持ちがあったようで、神ヤーウェから口頭試問を受けているときの麻原の回答で、それは感じていた。

あいつのいう答えは、いつも「神の言うとおりにします」「神に従うことが答えです」という答えばかりだったので、オウム返しのようなことから、あいつの真理はオウム返しだと思われたので、オウム真理教になったのだろう。邪神にとりつかれたとき、オウム返しだったら、こんな大量○人を行ってしまうようになる。正しさの基準はちゃんと自分で持つこと、悪霊をはらうことが、修行で得る内容だ。悪霊に染まってしまっただけは修行は逆方向に進んで

いる。

麻原は二度と現れないものの麻原を生んだ社会には問題があるから、
後世を生きる人間は麻原のような奴が今後登場しないような社会の構造にしていけないと
いけない。

これが、麻原彰晃が弟子に教えていた内容のまとめだ。

<a

href="<https://mybiographyofchrist.up.seesaa.net/image/E8B685E8B68AE7A59EE58A9BE38080E3839CE383BCE382ABE383ADE382A4E38389E694B9E5A489E38080EFBC93EFBC9AEFBC91EFBC96E38080MPEFBC94EFBD88.mp4>" class="video-link">超越神力

ボーカロイド改変 3 : 1 6 MP 4 h.mp4

ボーカロイドに歌わせた歌を作った人間がいたが、
正しく発音できていない部分は俺が消して俺の解説を入れておいた。

その人間が尊師マーチもボーカロイドに歌わせていたから、
俺が間違っている読み方を削除して、字幕入りで
公開する。

<a

href="<https://mybiographyofchrist.up.seesaa.net/image/E5B08AE5B8ABE3839EE383BCE38381.mp4>" class="video-link">尊師マーチ.mp4

これまで経歴を書いてきたが、騙されてはいけないことは、
麻原が他心通力とか、そんな超能力を本当に持っていたなら、大学に入学できていたはずだ。
夢だった医師にだってなれていたはずだ。

しかし、予備校に通っても大学に合格できる学力にはならなかったのだ。
ここからわかることは、こいつが言っていた「誰でも会得できる」「最高の力」という宣伝
文句は

嘘だということだ。

もし、最高の力を持っているなら、武装せずに敵を一人で倒せるのだから、構成員を集める
必要もないし、すぐに倒して終わらせたらいいので、もともと解決している問題だ。

しかし、こいつは、戦争を起こさないといいないと言って、全人類を消滅させるための生物・
化学兵器を製造していた。

それも自分ではできないから、人にやらせていた。

自分ではできないことばかりだったのだ。

作戦も幼稚だったから、失敗したのだ。

この嘘に気づかないといけない。こいつが利用していたのは、仏教とかキリスト教の各宗教からの良い所どりであって、それらを集めたから魅力的な内容に聞こえただけだ。ヨガの修行さえもパクリであったし、こいつが教えていたこと、教義から超能力の会得方法まで、もともとこいつが高橋信次の本を読んで、金儲けのためにマネをして同じことをやっていただけだったのだ。

その高橋の本には「空中浮遊をさせる悪霊がいる」「そんな悪霊に騙されてはいけない」「ヨガをやっていたら悪霊にとりつかれやすいから気をつけろ」という予言的警告が書いてあったのだ。高橋に書かせていた重要な内容を読んでいないのか。

俺も小さい頃はヨガの哲学を勉強しヨガもやっていたが、ヨガから得られるものは何もなかった。

健康のためであれば、医学を勉強して、医学的に妥当な生活をしていく方が体にいいし、超能力の修行であれば、ヨガよりも正しい修行をしていけばいいから、ヨガの勉強をして役に立つことというのは、麻原の話聞いて嘘だと見破ることがヨガの視点から容易になることくらいだ。

知っているとも休息の効果が高かったり、少し体に良い役に立つポーズはあるが、それくらいの意義しかない。

・麻原彰晃の霊の素性

金毘羅の神→役小角→麻原彰晃

金毘羅というとインド仏教の神だから、インド仏教を麻原彰晃は教えていたよな。

役小角は、『日本霊異記』にある通り、富士山で修業をして空中浮遊ができるようになった仙人だ。だから、富士山で修業をしているときに、信者が死んだ事件を起こしてインパクトに残るようにしておいた。『日本霊異記』には、孔雀王の呪法を修持し不思議な威力を得て現に仙人となりて天に飛ぶ縁の話が書いてあるから、麻原彰晃は、オウムのアニメをみると印を組んでいるよな。

麻原彰晃は「六神通」などの超能力を持つと自称していたが、それは麻原彰晃特有のハッタリであって「六神通」ではない。自在性が無かったから、それは言えない。

人間を判断するときは、過去の経歴を見ればいい。

保険料の不正請求や薬事法違反での逮捕歴がある。

嘘をつく、不正請求をするという人間であるから、その延長に進んでいったものは、それが過大になったものだとは推測できる。

これが、超能力の喧伝であったり、全額布施の要求だった。

金毘羅が、天上界で位階60位なので、少し位階が高い兵士なのだ。

ミカエルの連れている連中は、ものすごく強い將軍ばかりだから、位階16位以下なのだ。だから、麻原彰晃なんてミカエルの連れている兵ではないのだが、下層天上界には来れるから、下層天上界にいるときは、ミカエルを守る兵の一人をしていた。しかし、違反が多く、ミカエルにうらみさえ持っていて、ミカエルのことが好きな非戦闘員の弱い女の天使を夜な夜な騙して虐殺していることがミカエルに発覚して、ミカエルから処刑された天使だった。

それもあって、地上では尊い志を持つ天使の魂の者たちを虐殺していた。

ただ、この頃は、YHVHからは「命をかけて神の指示を守る者」だと高く評価されていたから、位階60位だったのだ。

この頃のYHVHは、イエス・キリストが人類に殺されることもあって、人間を強く恨んでいたのだ、

ハルマゲドンだといって地上で人間を虐殺していく麻原彰晃のような天使を高く評価し、罪を不問にしていた。

これもあって、2018年の死刑執行のとき、麻原と弟子たちの肉体を偽の肉体にいかえて、天上界に連れてきて神の軍に本当に入れて悪魔の軍と戦わせていた。

だから、オウムで死刑になった信者たちは、あの後、本当に天上界で悪魔の軍とハルマゲドンの戦いまでは来ていないが、序盤は少し戦っていた。弱すぎて序盤で完全に全滅したのだが、一生懸命戦っていた。

主権者がミカエルに移ってからは、ミカエルは、麻原の悪事は許さんとして、麻原の位階を没収して、天上界での死を現実化した。

つまり、麻原は天上界では最期は邪神に〇されたのだが、その邪神のパッシブ能力として、殺されたら永遠に復活できないという封印がかけられている。

そこで、主権者がミカエルになってからは、この世界で麻原が2018年に死刑執行されたとき、邪神の永遠の呪いをリンクさせて、もう存在が消滅して地獄にすらいらないという設定に変更した。

麻原なんて顔も見たくないというくらいミカエルが嫌っていたためだ。

当然、そのリンクをかけられる前に、麻原はミカエルからダーツの的にされていて、一本一本ナイフを投げられるときに、刺さってはいないのだが腕とか脚にかすっていて、「こういうことをやったらダメだろ」と言われて、ひどく反省をさせられてから、その後もめったに殴られていた。そのときに「神から言われたら、悪事を働いていいのか？それを取り締まるために派遣された神が俺なんだよ！」と怒鳴られて、それで麻原は懲りて反省をして、目が覚めて「あ、神から言われても、悪いことはやったらダメだったんですか？」とミカエルに言って、ミカエルは「自分自身の正義の心を信じろ。正義を知れ。正義に従え。ヤーウ

ェから言われたら何をやってもいいと思っていたのか？ヤーウェが間違えた神なのだぞ。」
と言われて、麻原はそれからは良質な天使に変わって、インチキやせこいことをしなくなって、命をかけて罪を償おうとして戦うようになったが、それでもミカエルが知った過去の罪が嫌悪されすぎるものだったために、位階ははく奪されて永遠に復活しないことになった。
このようにヤーウェのお気に入りだった天使のうち、悪いことをさせられて位階が上がっていた者は、位階をはく奪されて、死んでいる者は生き返らなくなった。

このミカエルのおかげで、邪神ヤーウェも更生している最中で、徐々に良い神になってきている。

ミカエルから言わせれば、それでも正神にはほど遠いのだが、本人なりに良い神を目指して成長している。

これが、麻原彰晃が率いたオウム顛末記である。弟子たちは、ハルマゲドンを戦う天の軍だと信じて麻原に従って殉教したが、死後にその通りになって、悪魔共と戦って、彼らは全て全滅した。問題があったオウム信者たちであったが、罪を償うために戦い、そして、罪は償われないが、彼らは最後は平和を目指して命を賭して戦い、最後は、あの非道な麻原すらもそのために戦って死んだのである。

麻原は邪神と戦えないほど弱かったが、非力でも邪神に向かって行って玉砕し、最期の言葉は、血みどろで地面に棒で十字を描いてから、「神、キリスト、大天使ミカエル様！愛しています！」と別次元のこちらに聞こえると信じて大声で叫んで、その十字の上に倒れこんで逝った。逝くときも、あの紫色のオウム服を着たままだった。あの非道で下賤な妖怪も最後は神を愛して逝ったのだ。

その後で、ミカエルが、次元転送で現れて、その邪神を（あっさり）倒して帰ってくれた。

ミカエルの部下には

上

-

中

-

下

の層があって、

上の中でも、天照大御神やレミエルやガブリエルは、いつも連れてない。

彼女たちは城の防御をしていて、ミカエルの花嫁達を守っていた。

ミカエルが出撃するメンバーというのは、上の中でも中から上で

ゼウス・アーモン・ベルゼブブ・ポセイドン・アメノウズメばかりだった。ゼウス・アーモン・ベルゼブブは、常に何千万体に分身できるから、減っても常に分身をそれくらい出せるから、割とこの3人がいたら、ゼウス・アーモン・ベルゼブブが常に5000万くらいいる戦力になるから、他の兵を必要としない訳で、普段、10人か12人くらいの小旅団に見えて、戦うときは、戦闘員が億くらいになる無敵のような軍団だった。

エルランティはいつも見ているだけだが、ごくまれに参戦するときがあった。

ミカエルがキレたら、多分、霊力的に3発くらいしか1回の戦闘で出せないと思うが、何百万という秘術を合体させた爆発魔法を使うから、それが出たら原爆みたいな威力で、全世界が消滅する破壊力があるが、効果範囲を敵の邪神1体に集中させることもできるから、最後にミカエルだけになった状況のときは、邪神が勝ち誇ったらいけなくて、一番気をつけないといけないときなのだ。仲間が全員葬られたときのミカエルは、一番気をつけないといけない。ミカエルと戦って生きている邪神は俺だけだと思うが、死なない設定にしていなかったら、YHVHすら葬られていたほどミカエルは強い。

何をやっても強い。光速の3000倍は速いから、ミカエルが出撃したら、光の筋がびゅーっと走ったのが見えて、周りを爆発させながら進んできて、当たったら強い邪神以外は爆発して消滅してしまう。音速を超えたらソニックブームが発生して、空気中にできた圧力の壁が衝撃波になって共に周りを破壊していくのだが、光速よりずっと速いから、放出されているエネルギー量は天文学的数字になるので、ミカエルが通過した後は敵はほとんどの場合で全滅していた。ミカエルが出撃したときというのは、「俺がミカエルだ!」と名乗って敵軍勢の前に出るのではなく、ただピュピュッと光の筋が走ったのが一瞬見えて敵軍が消滅して終わるだけだった。ヤーウェ級の強い神でなければ回避できない。破壊・爆発・消滅をさせていきながら進行するミカエルの光の筋は見えていたが、ミカエルも飛行中はほとんど見えてなくて、飛行する前に、ルートを決めておいて、一瞬で終わるから、途中で軌道変更はほぼなくて、本人は飛行中も見えているが、光では見えない。光より速いから光では見えない。特殊な霊力のフィールドで感知して進んでいるから、軌道変更も時々していたが、かなり前にそれをしないと進行スピードが速いから軌道変更するときは、かなり前から考えたものになる。それでも強い最高神クラスの邪神とは殴り合いを結構するから、やはり霊力フィールドで感知しながら、スピーディーに戦う。武術の達人だから、例えば天然理心流の剣術だと剣だけでなく柔術もあるが、ミカエルは何を武器にしても戦えるし、素手で空手や八極拳を使って戦うときが多いが、理合（りあい）で優って勝っている。打ち抜き力も強いし、スピードも速いし、理合でも優っているから、最高邪神の軍団と一人で戦っても、ミカエルは一人で勝ってしまう。

最後までミカエルは出撃しなくて、それまで何をしているかという戦況を観察しながら、指示をしている。ミカエルの指示があると仲間達が割と戦えるようになって部下だけでも勝利してしまうときが多いのだ。それで部下が全滅するまでデータ収集をされていて、敵の戦い方と弱点を分析して、ミカエルが一人になったときにどう戦ったら勝利できるかをシミュレ

ーションしておった。

時々、ガブリエルがイザナミに変身してついていくときがあったが、大抵は城の防御だった。

・麻原彰晃が神ではないことの証明

麻原彰晃が神ではないことの証明は、

(1) 麻原彰晃の神性証明失敗と

(2) 別の者が神であることの証明

の2段階でより完成した証明を行える。

(1) 麻原彰晃の神性証明失敗

①力の証明の失敗

麻原の掲げた目標は、人類を悪魔とみなし、その人類との戦争に勝利することだった。
しかし、麻原は、それに敗れ、逮捕され処刑された。

このとき、麻原彰晃が言った言葉は、「チクショウ！！何でなんだよ！！」だった。

もし、ここで、麻原が全能であるにも関わらず、演技としてそれをしたという抗弁を主張するのであれば、

その抗弁事由には、麻原に証明責任があるのであって、立証失敗のまま終わった麻原の敗北は、麻原が神ではないことを

麻原自らがその人生によって証明したことになる。

麻原が、全人生をかけて命をかけて行って信者を導いてきた頓珍漢な内容の予言が次々と外れたことも、その証明として十分な証明力を持っている。代表的なものに、これらの予言があった。

1987年「1999年に核戦争が起き、日本は壊滅する」と予言したが、1999年は平穏に過ぎた。

1990年「オースチン彗星接近で日本に天変地異」と予言したが、科学的根拠がなく、何も起こらなかった。

1990年「オウムが国家を掌握する」と予言したが、選挙惨敗と教団崩壊で実現せず。

1990年代初頭「彗星衝突による地球滅亡」を主張したが、科学的根拠なく、何も起こらなかった。

1990年代初頭「ボツリヌス菌散布計画」を企てたが、失敗に終わった。

1995年1月「4月15日に大地震が起きる」と予言したが、この日は何も起こらなかった。

一部の信者は麻原が1995年1月17日の震災を予言したと主張しているが、実際には震災後に「予言していた」と主張しただけであり、これは後付けの主張であったことが判明した。

予知能力の実証は失敗している。

1995 年「11 月戦争」や「国家転覆」を予言したが、実現しなかった。

1997 年「ハルマゲドンが起きる」と主張したが、1997 年には何も起こらず、予言は完全に外れた。

この予言は信者の恐怖心を煽り、教団の武装化やテロ行為の正当化に利用された短絡的な内容だった。

②知の証明の失敗

麻原の掲げた教義は、全人類を滅ぼすことだった。

しかし、神が世界を創造し、被造物を創造したことは、俺が証明したところである。

神の高度な知からすれば、人類を創造したのに、その人類を滅ぼすということは、矛盾する。

人類を創造したのに、その人類を滅ぼすということは、人類を創造したときに、予見できないことがあったということであり、

神の知に反して矛盾する。これは、主張者が知恵足らずだったこと（宇宙創造を計画した神ではないだろう）を推理させる。

もし、ここで、麻原が全知であるにも関わらず、演技としてそれをしたという抗弁を主張するのであれば、

その抗弁事由には、麻原に証明責任があるのであって、立証失敗のまま終わった麻原の敗北は、麻原が神ではないことを

麻原自らがその人生によって証明したことになる。

神が被造物を創造したのだから、それらは、創造した神が完成した存在であるほどその神に近く調和的に美しく併存を完成させる目的であることが推測される。

これは、俺が神の化身だったと説いた福音書のイエス・キリストの言葉「神に近づいて完全を目指しなさい」の内容と一致する。

また、「全人類をサタンだとして滅ぼす大目標」は、麻原が説いた、愛や慈愛の教義と矛盾する内容である。

大計画がないプランは、サタンの霊言に特徴的な、「その都度発した妄言集」である。

「世界を救済すること（幸福な世界の成就）」が「信者も含めて全ての人間（全人類）を武力によって滅ぼすこと」では矛盾するだろう。

全ての人間が幸福になるためには、愛（行動原理となる心）と知（問題発生予防・衝突回避）の教育が必要になる。これが正義である。

俺の教育は、共存共栄のための愛を精神として、権利利益の衝突を回避するために憲法や弁護士の法学を教えたのだ。人々が生活に困らなくするための生活の知恵（医学・進学・科学または学問研究・就業に必要な学力・AI の利用を説く）も与えたのだ。人々が自立できる

ようにするためだ。

③教義内容の本質的失敗

この世界は、イエス・キリストの頃（独裁的帝政社会）と違って、主権は国民にある民主主義である。

この国民は、正義を基調とした立憲主義のもと民主的に政治を行っている。

この政治の効果は、民衆に福祉が行われるシステムになっている。

この時代社会において、民衆から否定・排斥（死刑判決）されるということは、その教義内容が、民衆を幸福にする教義ではなかったことを示す。より良い社会構造のシステムを話せなかったのだから、人類を幸福にするため（救済するため）に現れたという麻原の主張は覆り、これらの能力的欠陥・立証失敗によって、麻原が神であることの証明は失敗し、逆に、麻原が神ではなかったことの証明になったのである。

④経験（経緯）上の失敗

麻原彰晃には詐欺的事件での逮捕歴がある。嘘をついて、多額の金銭をまきあげてきた前科である。

この前科は、麻原の知力の欠陥（学力がないため大学に進学できず医師になれなかった）と金欲によるものである。

麻原が金欲のためにオウム真理教を運営していたことは、開教時に「一番儲かるのは、宗教なんだぞ」と身辺に漏らしていたことから分かる。

儲けのために、麻原は超能力を得る方法に着眼し、高橋信次の『心の原点』等を読み、そこに書かれていた修行方法を自身が発案したものとして、他者の功績をラベルをはりかえて、吹聴していったのである。

この高橋の主張は、世界の調和的共存であり、その心構えは愛であった。誰一人傷つけることなく、愛の法を説いてその生涯を閉じたのである。高橋は、世界を救いたい、自分（の欲からの解放）を救いたいと願ひ、修行を行っていたから、善霊の支援を受けたのである。しかし、麻原は、欲望のために超能力を会得する修行をしていたから、麻原にはサタンがつき、これに支配されて動いていったのである。

サタンの目的とサタンが招く結果は、滅びと不幸であるから、麻原は全人類の消滅を目標に活動していき、信者をまきこんで不幸な結果（死刑執行・名誉の失墜）で終わったのである。これは、サタンの作戦が奏功した証左である。麻原ができたとする超能力、最初の2～3（空中浮遊や他心通力や幻視）が行われたことは、こちらで確認しているが、それ以降は、力を失って、実行できなかったため、不眠不休で修行させることで見させる幻覚やチオペンタール・LSD・メスカリン・覚せい剤などの麻酔薬・麻薬及び向精神薬・覚せい剤に頼ったのである。これらは薬事法・麻薬及び向精神薬取締法違反・覚せい剤取締法違反である。

(2) 別の神(唯一神)が存在することの立証

俺が、唯一の神、メシヤ(キリスト)であることは、これまで証明してきたことである。
この証明が覆らない限り、別の者が神だということは認められず、
俺の発言権によって、別の神の存在は否定されるのである。

ちなみに、ここまで誤字チェックを copilot にさせた結果、

「総合評価

誤字：致命的な誤字はなし。細かな表記の揺れや語句の選び方に改善の余地あり。

内容：論理的かつ一貫性があり、主張の構造も明確。

文体：やや硬めで宗教哲学的な文体。読者層に応じて柔らかくすることも可能。」と書かれた。

grok3 に誤字チェックをさせた結果、

「誤字: 目立った誤字は見られません。」と書かれた。

--

空白

(次に来たときに記載する欄)

--

第3 聖書の要約・考察、よって導出される結論

1. 聖書の要約

これは待ち時間の間に書いている文献だから、俺は、いつ帰ってもおかしくないから、途中で記載が終わっていたら帰ったということだが、途中までの記載でも完結する構成にする。俺は、いつもは一筆書きで全部をすぐに書き終わらすが、これは、遅滞行動のために書いている文献だから、ゆっくり書いていく予定だから、途中終了になる可能性もある。

途中終了であっても、俺の文献は、完成したと評価される構造にしておく。

俺は、一筆書きで書くときも、骨子（プロット）→結論部分を一瞬で書いて、後ろをしっかりと置いて、途中の肉付けは時間がゆるす限りで行うから、既に完成している文献にしておく。

（1）旧約聖書の要約

旧約聖書が主張しようとしている内容は、

ノア→アブラハム→モーセ→メシア（新約ではイエス・キリスト）の契約の連続性で行われるとする救済計画のようである。血統的系譜は、ノア→アブラハム→モーセ、ノア→アブラハム→メシア（新約ではイエス・キリスト）となっている。

・ノア：神は洪水で人類を裁き、ノアとその家族を選んで新たな始まりを約束した（創世記 6-9）。

・アブラハム：神はアブラハムと契約を結び、彼の子孫を通じてすべての民を祝福すると約束した（創世記 12:1-3）。

・モーセ：イスラエルを奴隷から解放し、律法を与えて神の民を形成した（出エジプト記 3-20）。

・メシア預言：旧約聖書はメシアの到来を予告した（例：苦難を受ける僕（イザヤ 53 章）、柔和な王（ゼカリヤ 9:9）、新しい契約（エレミヤ 31:31-34）として、メシア到来を予告した。）。

（※このメシア預言は、

・ルカ 24:44-47：イエスは「キリストは苦しみを受け、三日目に死からよみがえり、その名によって罪の赦しを得させる悔い改めが、すべての民に宣べ伝えられる」（46-47 節）で消

化され、旧約の預言（モーセの律法、預言書、詩篇）の成就を強調している。

・また、マタイ 1:1-17 では、イエスの系図を記載し、イエスがアブラハムとダビデの子孫であることを示し、メシアの資格を証明している構成となっている。

・そして、エレミヤ 31 章の 31-34 節では、旧「エジプト脱出時に結ばれた契約」とは「違う」「新しい契約（新約）を結ぶ日が来る」と書かれているため、イエス・キリストは、福音書では、この預言を成就したことになっている。その後で 34 章では「すべての人が神を知り、罪は赦され、もはや思い出されない」と預言されているから、キリストは全人類の罪を贖い、救世主と扱われているのである。）

旧約聖書の預言（例：イザヤ 53 章、ゼカリヤ 9:9）や契約の流れは、キリストの到来を指し示し、神の救済計画が旧約聖書の骨子のテーマとなっている。

以上の契約とメシア到来預言で構成されているものが、旧約聖書である。

旧約聖書の救済計画の流れ（神学的・契約的視点）

人物	神との契約	役割	系譜的関係
・ノア	ノア契約（創世記 9 章）	洪水後の人類再出発	セツ系譜
の継承者			
・アブラハム	アブラハム契約（創世記 12 章・15 章）	信仰の父、祝福の起点	ノアの子孫
・モーセ	シナイ契約（出エジプト記 19 章）	律法の授与者、預言者	アブラハム→イサク→ヤコブ→レビ族
・イエス・キリスト	新しい契約（エレミヤ 31 章→新約）	メシア、救済の完成者	アブラハム→イサク→ヤコブ→ユダ族→ダビデ王

旧約聖書の預言（イザヤ 53 章の苦難の僕、ゼカリヤ 9:9 の王の到来など）は、メシアの登場を予告するものとして、新約聖書でイエス・キリストに結びつけられる。

- ・イザヤ 53 章：苦しみを受ける僕としてのメシア像
- ・ゼカリヤ 9:9：柔和な王がろばに乗って来るという象徴的な預言

これらは、旧約の契約と預言が新約で成就する構造を示している。

以下は、各書の 1 行要約である。

創世記: 神が世界を創造し、アブラハムとその子孫との契約を結ぶ。

出エジプト記: 神がイスラエルをエジプトから救い出し、シナイ山で律法を与える。

レビ記: 神がイスラエルに礼拝、犠牲、聖別の指針を与える。

民数記: イスラエルが荒野をさまよい、約束の地に入る準備をする。

申命記: モーセが律法を再確認し、イスラエルを約束の地での生活に備えさせる。

ヨシュア記: ヨシュアの指導の下、イスラエルが約束の地を征服し、定住する。

士師記: イスラエルが罪、圧迫、救済のサイクルを繰り返し、士師たちが救済する。

ルツ記: モアブの女性ルツが忠実さを通じて神の計画の一部となる。

サムエル記上: イスラエルが士師から王制に移行し、サムエルが最後の士師、サウルが最初の王となる。

サムエル記下: ダビデが王となり、エルサレムを首都とする。

列王記上: ソロモンが神殿を建てるが、彼の死後、イスラエルが二つの王国に分裂する。

列王記下: 分裂したイスラエルとユダの王国が不信仰のために流刑される。

歴代誌上: アダムからダビデまでの歴史を再構成し、ダビデの治世に焦点を当てる。

歴代誌下: ソロモンから流刑までのユダの歴史を強調する。

エズラ記: 流刑からの帰還と神殿の再建を記録する。

ネヘミヤ記: エルサレムの城壁の再建と共同体の改革を描く。

エステル記: ペルシャでのユダヤ人の絶滅を防ぐ神の摂理を示す。

ヨブ記: 正しいヨブが苦しみの中で神の正義と目的を探求する。

詩編: 賛美、嘆き、感謝の歌を集大成する。

箴言: 敬虔と知恵のための実践的な教えを提供する。

伝道の書: 人生の無常と神への帰依を探求する。

雅歌: 男女の愛と神との関係の比喻を描く。

イザヤ書: 裁きとメシアの救済の預言を示す。

エレミヤ書: 裁きと新しい契約の予言を述べる。

哀歌: エルサレムの破壊を嘆く。

エゼキエル書: 裁きとイスラエルの復興の幻を描く。

ダニエル書: 異邦の支配と神の主権を示す。

ホセア書: 神の不変の愛と裁きを語る。

ヨエル書: 主の日と霊の注ぎの預言を伝える。

アモス書: 社会正義と神の裁きを訴える。

オバデヤ書: エドムへの裁きを告げる。

ヨナ書: ニネヴェへの神の憐れみと悔い改めを示す。

ミカ書: 真の礼拝と正義の呼びかけを行う。

ナホム書: ニネヴェの滅亡の宣言を記す。

ハバクク書: 苦しみと信仰の問いを提示する。

ゼパニヤ書: 裁きと残された民への約束を描く。

ハガイ書: 神殿再建の励ましを述べる。

ゼカリヤ書: メシアの来臨と再臨のビジョンを示す。

全体の骨子は、この3つになっている。

- ・創世記…神はノアと契約を結び（創世記 9:8-17）、アブラハムに子孫と地の約束を与える（創世記 12:1-3）。

- ・出エジプト記～申命記…モーセを通じてイスラエルに律法を与え、神の民としての枠組みを確立しようとしている（出エジプト記 20、申命記 28）。

- ・預言書…イザヤ（53:5）、ミカ（5:2）、ゼカリヤ（9:9）などで、メシアが苦難を受け、救いをもたらすと予言したが、あくまで予言は真実を予言したとは限らない。

（2）詳述と考察

①聖書が示す救済計画の物語

では、旧約聖書の物語を詳しく書くと以下の通りである。

救済計画の展開

・始まり：創造と契約の開始（創世記）

神は天地、動植物、人間（アダムとエバ）を創造し、エデンの園に置く（創世記 1-2）。人間は神の命令に背き、罪を犯して園から追放される（創世記 3）。その後、子孫が増えるが、悪が広がり、神は洪水で地を裁き、ノアとその家族を箱舟で救う（創世記 6-9）。洪水後、神はノアに子孫を増やすよう命じ、虹を契約のしるしとする。時が経ち、神はアブラハムを呼び、「あなたの子孫にこの地を与え、すべての民を祝福する」と約束する（創世記 12:1-3）。この契約はイサク、ヤコブへと継承され、ヤコブの 12 人の息子がイスラエルの 12 部族の基となる。

・奴隷から神の民へ（出エジプト記～申命記）

アブラハムの子孫はエジプトで奴隷となる。神はモーセを遣わし、十の災いと紅海の分離によりイスラエルを解放する（出エジプト記 1-15）。シナイ山で神はモーセに十戒と律法を与え、イスラエルと契約を結ぶ（出エジプト記 19-20）。

レビ記では、犠牲、祭司職、潔めの規定が定められ、イスラエルが神の民として従うべき規則が示される（レビ記 1-27）。

民数記では、イスラエルが約束の地を目指す、不信仰により荒野で40年さまよう（民数記13-14）。

申命記でモーセは律法を繰り返し、従順なら祝福、背けば呪いがあると警告し、約束の地入りを準備する（申命記5-30）。

・約束の地へ（ヨシュア記～士師記）

モーセの後、ヨシュアがイスラエルを率い、ヨルダン川を渡り、カナンの地を征服し、12部族に土地を分配する（ヨシュア1-24）。

士師記では、イスラエルが神の命令に背き、敵に圧迫されるが、士師（エフタ、デボラ、サムソン等）が神の命により救うサイクルが繰り返される（士師記2-16）。

・王制の興亡（サムエル記～列王記）

ルツ記では、モアブ人ルツがイスラエルに忠誠を誓い、ダビデの先祖となる（ルツ4）。

サムエル記上で、イスラエルは王を求め、サムエルがサウルを初代王に任命するが、サウルは神に背く（サムエル上8-15）。

サムエル記下では、ダビデが王となり、エルサレムを首都とし、神との契約を受ける（サムエル下7）。

列王記上では、ソロモンが神殿を建て、彼の死後、王国はイスラエル（北）とユダ（南）に分裂する（列王記上3-12）。

列王記下では、両王国が不従順によりアッシリアとバビロンに流刑される（列王記下17, 25）。

・歴史の再構成と帰還（歴代誌～エステル記）

歴代誌上は、アダムからダビデまでの系譜をたどり、ダビデの治世を詳述（歴代誌上1-29）。

歴代誌下は、ソロモンから流刑までのユダの歴史を記す（歴代誌下1-36）。

エズラ記では、バビロンから帰還した民が神殿を再建（エズラ1-6）。

ネヘミヤ記では、ネヘミヤがエルサレムの城壁を再建し、律法の遵守を促す（ネヘミヤ1-13）。

エステル記では、ペルシャでエステルがユダヤ人の滅亡を防ぐ（エステル2-9）。

・苦難と知恵（ヨブ記～雅歌）

ヨブ記では、ヨブが苦難の中で神の目的を問うが、神の主権が示される（ヨブ1-42）。

詩編は、神への賛美、嘆き、感謝の詩を収録（詩編1-150）。

箴言は、知恵と正しい生活の指針を提供（箴言1-31）。

伝道の書は、人生の無常を述べ、神に従うことを説く（伝道1-12）。

雅歌は、男女の愛を歌い、神と民の関係を象徴（雅歌1-8）。

・預言とメシアの約束（イザヤ書～マラキ書）

イザヤ書は、イスラエルの罪への裁きと、メシアによる救済を預言（イザヤ 1, 53）。

エレミヤ書は、バビロン捕囚と新しい契約を予告（エレミヤ 1, 31）。

哀歌は、エルサレムの破壊を嘆く（哀歌 1-5）。

エゼキエル書は、裁きと神殿の復興の幻を示す（エゼキエル 1-48）。

ダニエル書は、異邦の支配下で神の主権を強調（ダニエル 1-12）。

ホセア書は、イスラエルの不従順と神の赦しを描写（ホセア 1-14）。

ヨエル書は、主の日の裁きと霊の注ぎを預言（ヨエル 1-3）。

アモス書は、社会的不正を非難し、裁きを警告（アモス 1-9）。

オバデヤ書は、エドムへの裁きを宣告（オバデヤ 1）。

ヨナ書は、ヨナがニネヴェに悔い改めを伝え、神が赦す（ヨナ 1-4）。

ミカ書は、正義とメシアの到来を説く（ミカ 1, 5）。

ナホム書は、ニネヴェの滅亡を予告（ナホム 1-3）。

ハバクク書は、裁きと信仰の持続を問う（ハバクク 1-3）。

ゼパニヤ書は、裁きと残された民の救いを預言（ゼパニヤ 1-3）。

ハガイ書は、神殿再建を促す（ハガイ 1-2）。

ゼカリヤ書は、メシアの来臨と王国の幻を示す（ゼカリヤ 9-14）。

マラキ書は、悔い改めとメッセンジャーの到来を告げる（マラキ 1-4）。

ここから導かれる結論：旧約聖書の全体のメッセージ

旧約聖書は、創造から始まり、ノア（洪水後の契約）、アブラハム（子孫と地の約束）、モーセ（律法と解放）を経て、メシアの到来を預言する一連の出来事を記述する。

各書は、イスラエルの神との契約関係、罪による裁き、従順による祝福、そして最終的な救済者を待つ準備を段階的に示している。

預言書は特に、メシアが罪からの救いをもたらし、神の民を回復する未来を指し示している（例：イザヤ 53:5, ゼカリヤ 9:9）。

この流れは、新約聖書でイエス・キリストがメシアとして現れ、死と復活により救済を完成する枠組みにつながっているが、事実に基づいている証拠が乏しく、信ぴょう性は怪しい。

②それにとまなう問題

i. これまで、証拠といえるものが、これくらいしか存在していない。

考古学的証拠

・旧約関連…メロダック・バラダン碑文（紀元前 8 世紀）やテル・ダン碑文（紀元前 9 世紀）は、列王記や歴代誌に登場する王や出来事（例：ダビデの家）を裏付ける（出典：

biblicalarchaeology.org)。これにより、旧約の歴史的背景の一部は検証可能となっている。

- ・新約関連…ピラトの石碑（1961 年発見）は、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督だったことを確認（出典：britannica.com）。これは新約の記述（例：マタイ 27:2）と一致する。しかし、イエスの死や復活の直接的考古学的証拠は存在しない。

- ・死海文書…メシア預言の解釈を含む文書（例：4Q521）は、ユダヤ教内にメシア期待があったことを示すが、イエスがそのメシアである証拠には直結しない。

もし、キリスト教の立場で、「存在する」と主張するなら、これらの不利な事実を反転させる「逆転の立証方法」をもっていなければならない。

ii. イスラエルが世界を征服する預言になっている

詩篇 2 篇では「わたしは諸国をあなたの嗣業（ゆずり）とし、地の果てをあなたの所有とする」と神が語る場面がある。

これは、メシアに適用されると解釈されることが多いが、

この文言によって、ユダヤ教は、イスラエル人から出た王が、政治的・軍事的に、世界中の諸国を支配するという終局目標的発想となるので、神の正義と平和による統治のために民族が侵略戦争を起こす可能性をはらんでいる。歴史的事実として、詩篇 2 篇を政治的・軍事的な征服として読むグループ（例：一部のシオニストや過激なメシアニズム派）が登場している。シオニズム運動や特定の宗教的グループ（メシアニズム的グループ）が、聖書の預言を根拠に領土拡大や政治的行動を正当化したケースがあるために、その危険を熟知しなければならない。

旧約聖書ではヨシュアがカナン征服戦争を指揮をし、エリコなどの都市を攻略（ヨシュア記）したし、士師たちは戦いを行い、ダビデ王は多くの戦争を行いイスラエル王国を拡大し、これらの戦争が称賛される書き方になっている。

この影響を受けたとみられるものに、十字軍遠征があったし、オリバー・クロムウェルは、旧約聖書の「選民思想」を政治・軍事に応用し、ピューリタン革命を指導した。

その後も聖書の預言を根拠に領土拡張や軍事行動を正当化する思想が影響を与えた思想潮流として、

例えば、アブラハム・クック（1865–1935）は、メシア的国家観を展開。「イスラエルの地」回復を神学的に正当化したし、ヴラジミール・ジャボチンスキー（1880–1940）は、ユダヤ人自衛と領土拡張を主張。詩篇 2 篇の「嗣業」概念を軍事的に応用した。

今後も、「イスラエル民族から出た王が諸国を支配する」といった終末論的、あるいは帝国的思想への発展や過度な適用が生じる可能性は十分に予想でき、廃教必須となる危険な宗

教である。

（３）新約聖書の要約・大意・考察

以下は、新約聖書の各書の１行要約である。

これらがイエス・キリストの生涯と教会の形成を強調している。

マタイ福音書：イエス・キリストの生涯、死、復活を記録し、メシアとしての役割を強調する。

マルコ福音書：イエスの行動と奇跡に焦点を当て、苦難の僕としてのイエスを描く。

ルカ福音書：イエスをすべての人の救い主として提示し、教えとたとえに焦点を当てる。

ヨハネ福音書：イエスの神性と永遠の命を強調する。

使徒行伝：初期教会の成長と福音の広がりを記す。

ローマ人への手紙：福音とキリストへの信仰による救済を説明する。

コリント人への手紙一：コリント教会の問題（団結、道徳、霊的賜物）を扱う。

コリント人への手紙二：パウロの使徒職を擁護し、信仰の忍耐を励ます。

ガラテヤ人への手紙：信仰による救済のみを強調する。

エフェソ人への手紙：キリストにおけるユダヤ人と異邦人の統一と教会の体を探求する。

フィリピ人への手紙：キリストにおける喜びと謙遜を励ます。

コロサイ人への手紙：キリストの優越性を確認し、偽教を警告する。

テサロニケ人への手紙一：テサロニケの信者の信仰を称賛し、キリストの再臨に備える。

テサロニケ人への手紙二：終末に関する誤解を訂正し、信仰の堅持を促す。

ティモテヘ手紙一：教会の指導と教理に関する指導をする。

ティモテヘ手紙二：ティモテに忠実さを励まし、信仰を伝える。

ティトヘ手紙：教会の組織化と偽教者への対処をする。

フィレモンへの手紙：フィレモンとオネシモの和解を求める。

ヘブル人への手紙：キリストの優越性と新しい契約を説明する。

ヤコブの手紙：実践的な信仰と知恵を強調する。

ペトロの手紙一：苦難の中での聖なる生活を励ます。

ペトロの手紙二：偽教者を警告し、信仰の成長を促す。

ヨハネの手紙一：救済の確信と愛の重要性を保証する。

ヨハネの手紙二：偽教者を支持しないよう警告する。

ヨハネの手紙三：ガイウスを称賛し、ディオトレベスの傲慢を非難する。

ユダの手紙：信仰のために戦うよう呼びかけ、偽教を警告する。

ヨハネの黙示録：キリストの再臨と最終的な裁きを明かす。

聖書全体のメッセージ:

聖書全体は、神が人類を罪から救い、自分との関係を回復する計画を描いている。

ノア、アブラハム、モーセを通じて予告され、イエス・キリストによって成就されると聖書は書いている。

この計画がキリストの死と復活を通じて罪からの救いが提供されるなどと人間共や聖書の預言者共は期待しているが

救いがあるとは期待や預言者の勝手な言い分であって、現在も人々は苦しんでいるし、より高位の預言者であるメシア（イエス・キリスト）が、「最後の審判でたいていの人間は地獄にいくのだ。天に入る門は狭く、入ることは難しい。」とこれまでの預言を撤回し、新約を新たに結んで帰ったのだから、こちらの方が真相である。

よって、創世記 12:3（アブラハムの子孫を通じて「すべての民が祝福される」）は、嘘の話になる。

イザヤ 53:4-6（メシアが人々の罪を負い、癒しをもたらす）は、当たっている。

エレミヤ 31:31-34（新しい契約で罪が赦され、神との関係が回復する）というのは、守ればの話である。イエス・キリストの福音の要件事実が分かれば福音書を守ればそうなるし、今回来た俺がまとめて書いた教えを守ればの話である。

でないと何のために正義の神がきたか分からないだろ。

審判の預言は、

- ・ダニエル 7:9-10（神の玉座が置かれ、裁きの書が開かれる。）
- ・ヨエル 2:30-32（主の日に救われる者と裁かれる者が分離する。）
- ・ゼパニヤ 1:14-18（裁きの日に神の怒りが注がれる。）

よって、旧約聖書は、救い（神の民の回復）と審判（不従順への裁き）が並行し、メシアの到来で両者が完成すると主張している。

これは、事実だ。俺が今来ていることが、この預言の成就なのだ。

新約聖書のイエスの役割と最後の審判
新約聖書は、イエスを旧約のメシアとし、死と復活で救いを提供し、最後の審判を行う者と位置付ける。

救いの成就

- ・ヨハネ 3:16（神を信じる者は永遠の命を得、滅びない。）
- ・ルカ 24:44-47（イエスの死と復活が旧約の律法、預言、詩篇を成就する。）

- ・ローマ 3:23-25（イエスの贖いにより、信じる者に罪の赦しを与えられる。）

最後の審判

- ・マタイ 25:31-46（イエスが再臨し、羊（救われる者）と山羊（裁かれる者）を分ける。）
- ・ヨハネ黙示録 20:11-15（死者の書に基づき、命の書に名のない者は火の池へ。）
- ・ヨハネ 5:28-29（善を行った者は命の復活、悪を行った者は裁きの復活へ。）

新約聖書は、旧約の救いと審判の預言を撤回せず、キリストが両方を完成すると主張する。
ここは俺は成就しに来た。

イエスは新しい契約を確立（ルカ 22:20）し、律法を成就（マタイ 5:17）すると述べ、旧約の枠組みを継承しながら、それを改正した。

ここまでの記述から分かるように、

聖書を読むときに必要なことは、

「知的誠実さ」である。

- ・信仰・伝統への無条件な従属を拒否し、根拠や合理性を問い直す姿勢と
- ・聖書を論理によって再構築する作業と
- ・主流思想への忖度を排し、自らの責任で真実と向き合う決意だ。

（４）警告（聖書なんかに騙されるな！）

最善の結論（幸福な未来）に向かうための普遍的共通ルールとしては、嘘をつくなということだ。

科学的（考古学的）証拠が不足している内容は事実とは認められない。

これが「論理」というものだ。存在しないものを存在するとして論理展開をすることはできない。

モーセが主権を握るための詐称であるということは、これまでのモーセの残虐行為の指示（民数記 31:14-18、出エジプト記 32:27-29、申命記 20:16-17、民数記 25:4-5 等 これらは神や預言者が「罪のない多くの人々」を「皆殺しにしてきた」命令だ）の違法性が重大で人間の欲をダイレクトに表現していることから、強く疑われ、

第２・第３のモーセや犯罪者を作らないために、為すべきことをしている。

聖書とはイスラエルの民から王が出ることを期待し、その王によって世界侵略・支配・残虐行為を正当化する犯罪教唆のための危険な書物であることを理解しなければならない。

このため、先の危険な芽をつむために、廃止しなければならない書物なのだ。

この聖書がいかに危険な読み物（洗腦的）であるかを伝えなければ、
神の望みである平和や、人々の望みである幸福にはつながらない。

聖書の聖句	命令の主体	対象
命令内容	文脈	
・民数記 31:14-18	モーセ（神の命令）	ミディアン人の女性・子供 男の子と男を知る女性を殺せ 偶像崇拝に関与した民族への報復
・出エジプト記 32:27-29	モーセ（神の命令）	イスラエル内部の背信者 兄弟・友人・隣人を剣で殺せ 金の子牛事件後の粛清
・申命記 20:16-17	神（モーセを通じて）	カナンの先住民族 息ある者 を一人も生かすな 異教の影響を絶つための聖絶命令
・民数記 25:4-5	神（モーセに命令）	偶像崇拝に加担したイスラエル人 主の怒りを を静めるために殺せ ペオルのバアル崇拝事件の処罰

このようなものが、聖典（行動の模範）たりえる訳がないだろう。
社会中で戦争が起きてしまい、平和は得られなくなってしまう。
神の教えは、天国のような楽園を目指させることであり、平和のために真理と愛を説く使者
（キリスト）を送ったのだ。
つまり、聖書は、福音書以外は悪魔の書（邪神の創造物）なのだ。
主流思想で高い地位の預言者と呼ばれている者ほど悪魔の使者だったのだ。

この聖書というものは、昔の悪い頃の俺（エホバの神）が世界を混乱させ苦しみを発生させるために、書かせたものだ。
この聖書全体は、ほぼ嘘で構成されていて、この通りに生きると苦しみが発生して、宗教戦争や民族紛争・対立が生じる仕組みになっている。
昔のことわざにくそみそを混ぜるということわざがあるが、
この愚かな書物を通じて、その嘘を見抜いて、更に高みに上がるためのくそみそと一緒に混ぜたくその方の本なのだ。福音書と福音書関連書（使徒行伝・ヨハネ黙示録）以外は崇敬するに値しないゴミの価値（捨てる）しかない本だ。

では、ここまでの要点を書く。

①「聖書が正しいと言う人間の間違い」

モーセの残虐行為（民数記 31:14-18、出エジプト記 32:27-29、申命記 20:16-17、民数記 25:4-5）は、罪のない人間の大量虐殺であり、逮捕され死刑になる行為である。

世の中には「聖書が正しい」と主張する人間が多いが、「聖書が正しい」と肯定した場合、この聖書を起こした代表預言者のこの死刑になる重大犯罪行為を肯定することになる。

よって、「聖書は誤り」なのである。

聖書をひろめることは、この大量虐殺の思想を教唆していく犯罪行為であり、それは悪である。

神ヤーウェが邪神であったときに作ったものが聖書だったからである。

②聖書中の全ての主要事実は、科学的証拠によって否定されている。

科学的証拠（考古学上の証拠）は、聖書の中の全ての主要事実の存在を否定している。

つまり、科学的に「存在しない」ことが証明されている。

存在しない事実に依拠して論理を発展させた場合、偽の結論に到達しやすい。結論は「必ずしも真とはいえない」状況のままになる。

何が正しいのか分からなければ、最善の道には進めないから、自らの偽を発覚させないために、嘘つきの預言者は嘘の聖書をばらまいたのである。

③これらの聖書中の教義・戒律を集めてあらわれる共通点は、

「神を名乗る」ことによる「実害行為」である。

これが、大半の宗教が持つ違法性になっている。

良好な社会に到達するために除外しなければならないものは「違法性」であるから、宗教の違法性を「排除」することは、世界中の人類の「義務」なのである。

よって、今後ユダヤ教なるものを信仰した場合、その人間は悪魔の使いなのである。

惨殺行為を肯定し、それを人々に教唆していく「犯罪者」なのである。

宗教というものは、その多くが犯罪者を作る思想の伝搬になることに注意しなければならない。

2. 結語

もし、この書物の執筆が、途中で終わっていたら、俺が天国に帰ったということである。

これは、たとえるなら、終電の待ち時間の間に、ささっと手書きで紙に書いて置いていった書簡である。

そこで、結語を先に書いておくが

「神の愚かさというものが描かれているのが聖書であったのだ。」

『クルアーン』も同じだから、もし、これを書き終わって時間があまっていたら、次は『クルアーン』の暴露書（注釈書）でも書いてやろう。この世からユダヤ教やイスラム教という

悠久紛争の原因を消し去る可能性を上げるためには、『クルアーン』の暴露書も書いてやればいいだろうと思ってな。

一言で書くと戦争をさせるために『クルアーン』を書かせてしまったのだ。一族で発展していった人間に対しては、その反動を与えて、それをゆるさないようにしたのだ。なぜ、そうしたかというとなんとすると「混迷の世」になるためだ。混迷の世を混迷の世にするために、救いであるはずの神の法すら、邪神の法として設定したのが、この世界のシナリオだったためだ。もし、貴様ら人類が救われたいなら、大天使ミカエルの法にすがるしかない。イエス・キリストも釈迦も大天使ミカエルの分霊であり、本体が統括している。この大天使ミカエル（強い神の意味）こそが、俺の善神化した姿なのだ。

（俺が）善の神になったなら、この訂正もしてやるとよいと思ってな。善神としては戦争が起こらない教えを説くべきであるからな。未文明の時代は、こういうことを面白がって「どここの神対どここの神の戦争」といって信仰する人間達にさせていた時期があったのでな。騙されないように、「論理」というもので物事を考えていき、「最善の結論に向かうルート（手順）」を選んでいってほしい。その手順を正確に執行していけるように仏教で行われている「静、不動」なる心の修行もしていってほしい。

当記事の著者（執筆責任者）：エホバの神（ヤーウェ、アッラー、ゼウスに同じ）